大正十三年七月上浣起筆

特別
イ14
1919
364

小精雜識

六

176632

小精雑識　六

大正十三年七月　日起筆

○村田良郷旧蔵本日本後紀影鈔本を購ふ、もと巻子本を冊子体に影写したるもの二冊あり、一冊は讃岐事比羅宮祢宜松岡調翁所蔵本にて巻第一第二第三を収む、此本巻尾に長保二年九月朔日明法博士左衛門権佐惟宗朝臣允亮一校了とあり、明治廿六年五月村田良郷鈴木金鐵に影写せしむとあり好影本也、且つ各本と校合しありて異同を標出せ

38- 9153

り、此書は去りて他書に無きこと多し、注意を要すへし、又
他の一冊は後説巻四を収む、巻尾に校合者の署名の
前巻と同し、而して井上頼圀所蔵本を據忠詔と課
しも影写せしむるあり、各書と対校異同を標示す
ること前巻と同し、踏襲すへき好書也 六月三十日琳
瑕瑜と枝を嫌ふ
○尚他に一書を嫌ふ

一 沙石集 十冊

此書巻尾に元和二年六月吉日 因智校
離とあり、元和活字本なり、西田慶長
醜似実、沙石集古来盛んに流布
すれとも版本の悪しくしてこれか最和う

きへし、元和本極めて稀観に属す、架
中の寶とすへし

○明の萬暦寧陵呂坤新吾著す所の語録六巻
吾萬延年間刻する所のもの版式尤も精、通常摘録
本多く流布す、略して呻吟語といふ、呻吟語原
名なれは、嘉慶元年陳淮完書を刻するの時呂新
吾先生語録と改題して世に行ふ、毋余頃日坊版一
部を購ひ枕頭に置き毎夜寝後読む、惟ふに宋
以後学者語録を著すれ心血を瀝くもの少からず、
澄居氏も做ふ者多く之を作る、然れとも多くは義
を鋪して言ふのみ、其の洞徹痛深刻、人事萬般に
渉つて剴切なるもの甚だ稀れ也、於是各家の

語録を渉猟し其高を摘き其英を摘み一部の書を為すもの相踵ぐ、因奇警の語を如斯摘録して多く具へれども、一部の原書ありて毎條深味を寓するもの新吾の語録の如きものあるを知らず、凡そ語録ハ文簡にして短、而して其義深く且つ徹するを要す、学殖博覧の外才智識と実験と兼具するものにあらざれバ能ハざるなり、本邦亦奇警の語を著すものあれど遠く支那に及ハざるものハ想ひ敢て譲らず才も識も必らずしも彼れの下に在らずと曰い、文及ハざる也、語録を作るハ長篇を作るよりも難し、呂新吾ハ呻吟の餘北の巨篇を為すと雖も、其呻吟の二字苦心を表すと云ふ

語録の好署れ也

七月一日記

○昨日左の図書を購ひ入る

一 冠帽図会 一冊

一 和蘭通舶 二冊

一 赤染衛門家集 四冊

一 浪華撰芳譜 二冊

右等の図書今ハ容易に手ニ入りかたきものゝ也、殊に「和蘭通舶」ハ極めて稀覯の書にて或る人甚だ稀に、此書ハ司馬江漢著ハす所にて文化二年春波楼蔵版と為す、江漢の家蔵版に、春波楼蔵版目録と称へる、此書と附随して銅版瀛海図あるも、この二書ハ図を説明するもの

となるべし、大体西洋諸国の地理図誌を叙することなれバ海路交通を中心とし各国を説き航海の指鍼たらんことを虔究したるものと此書の特徴あり、航海術の幼稚なりし当時、先覚江漢が此書あるハ偶然にあらず、近来和蘭砲術と唱ふる一類の書出で頗る世に重んぜられ、價も甚だ高し、此書何れの流布極めて稀に和蘭書沈勘、蒐集家も多くハ唯此書名を知るのみにて手に入るゝを難んず、余の偶然獲たるハ幸と謂ふべし矣、濃紙本数冊題簽ありて巻首山本北山の序あり、價四十円也

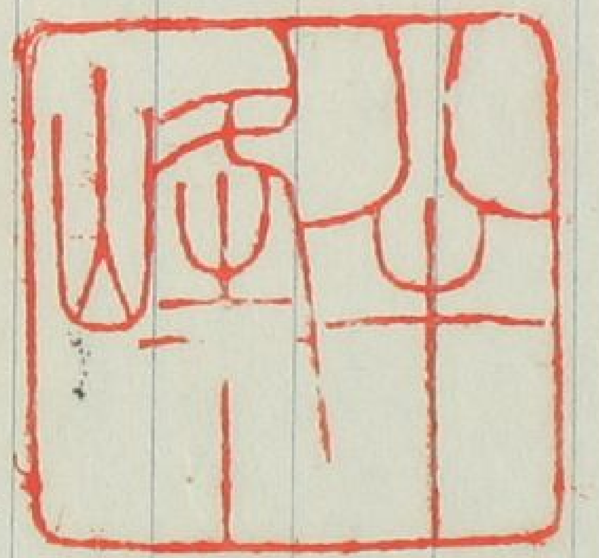
七月三日識

○石塚氏ニ據り野口英世の消息を聞く、彼ハ今南米にありて疫癘の研究をなし、端なく黄疫 Yellow fever の原因の鏍旋菌の排出物なることを発見し、血清を作りて患者を治するの效験著るしといふ、古来此の疫ニ罹るものの多く治すること無りしに、英世一たび之を研究して此の救治法あり、英世ハ超人といふべし、英世の妻ハ米人にて、此婦人ウヰスキーを用ひて男子の如く放蕩にて金銭を散ずること甚しく為めに英世の累をなす、英世能く婦を侮らざるは性の然らしむるなりしかれども彼れの一厄也

○服部耕石に嘱し、高田竹峰印二顆正平ニ嘱して余の印二顆並に成る、正平の印三顆其意

満たず、余揶揄して曰く、百年後に知己を待つの心とは
これ歟と、一笑

耕石、和石印材五六顆を贈らし来り示す中に
秩父石あり、余の初めて見る所なり、此石翡翠
のごとき緑斑あり、岫岩石の如く透明なり

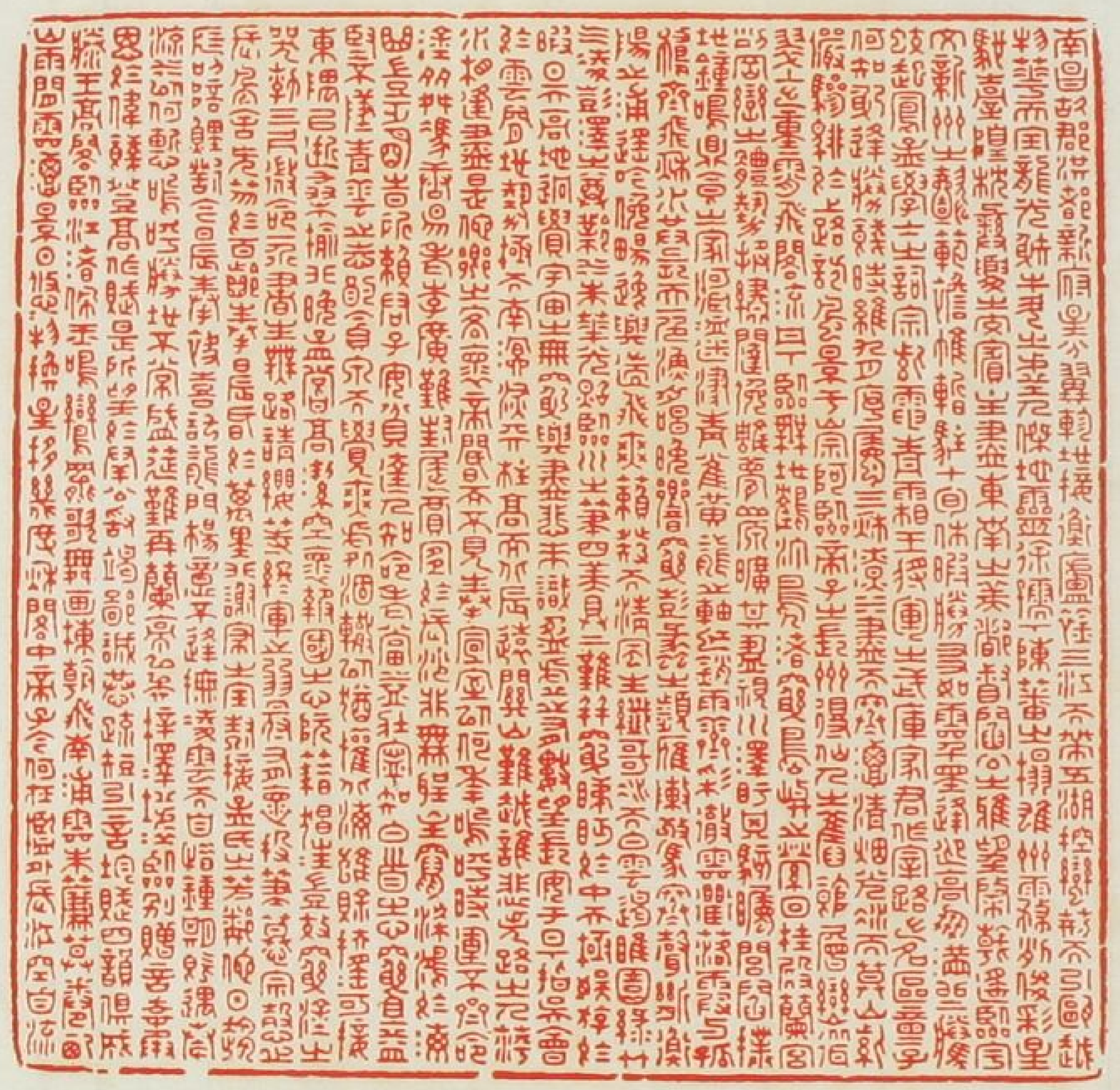


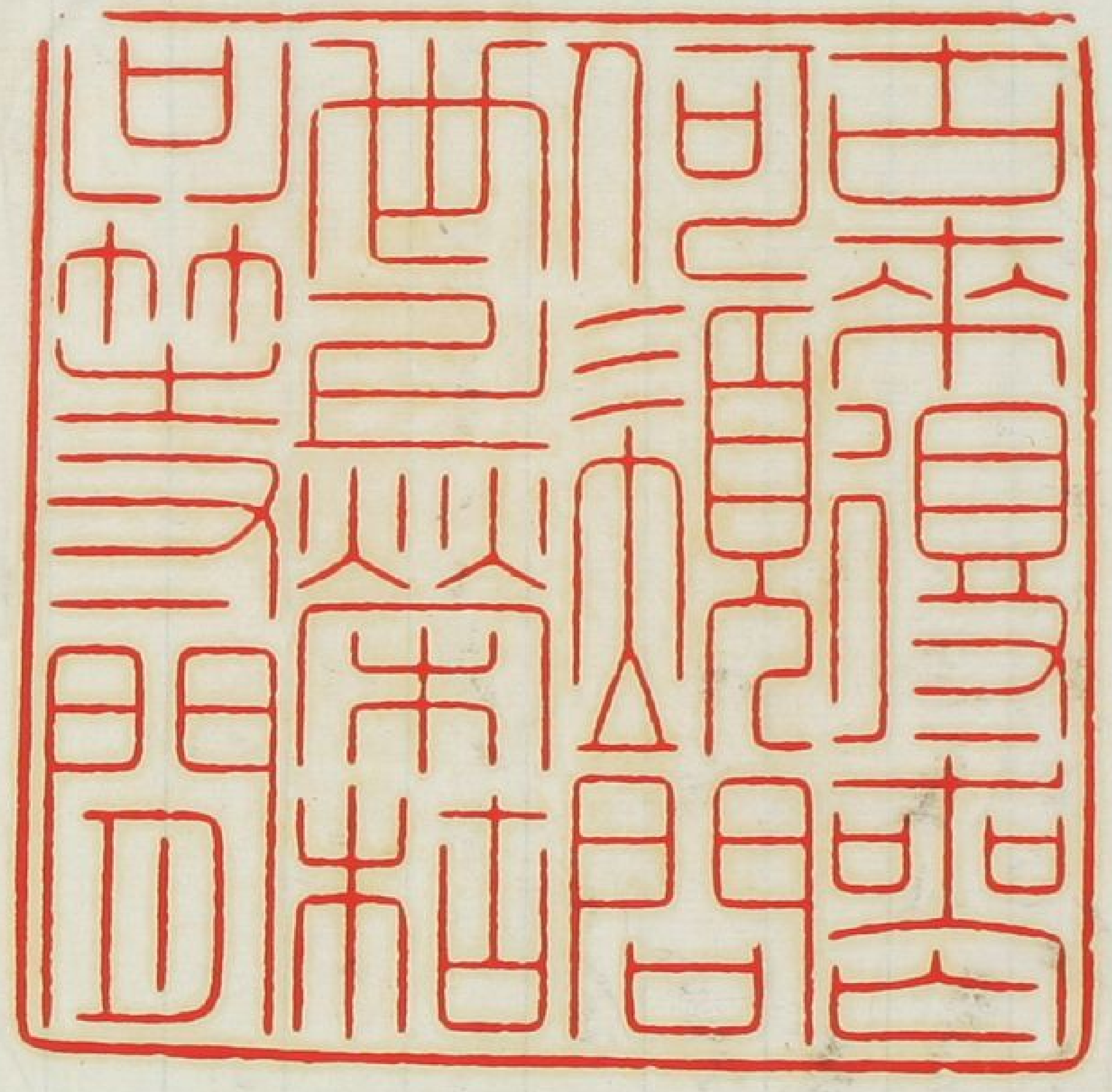
彫り味もよしといふ、其の翡翠に酷似するを
以つて、玉工は之れを珠に製し支那に輸出す

と原石甚だ廉なるも、加工すれば貴石の如
く見え価を高くし徴し得るより奸商之れを
なすこと少からず

秩父ハ良石の産地として知らる、硯材の
秩父産可なりといふ、全体硯材は水成岩の粘
板岩質のものがよく、而して地層の系統ハ
シヤール石層がよい、我々の秩父の古系統
ハ之れに属するといふ、印材の良石も
出るも[illegible]道理なる歟

○明四刊改文飛鴻堂印譜の複製を何心老人
がうやく第五集に及ぶ、本年予約家蔵の印譜
を借り、之をもととし、話次彼れの決を得つゝ
第五集に収めある印を點検するに、前集に
収めあるものと重複するもの弐十の多きあ
り、之れを除かんとも約二冊を減すべしと、
余飛鴻堂を愛し読するも一々比較して重複を
検したることなし、改文言ふが如くんば第五集より
杜撰のものなり、此の印譜の欽と謂すべし
何らかるが如し、摸印数を十枚餘贈られたる内
二枚をここに存す、





○福地櫻痴居士の子息福地信世、古河鑛業事務所にありて技師たり、余未だ其人を知らず、但だ櫻痴居士と舊あり、去る大正七年に居士十三回忌に子息の編する紀念録ありと聞き、人を以して之れをもとむ、今朝机邊に達す、之を見れば、還魂紙料と題名ある美濃紙和本なり、すべて故人の文話を集めて瑠璃版に附し、行實ハ一切録せず、紀念録としてハ最めつらしき向なれとも甚だ興味あり、表紙の字も櫻痴の自筆を写されたる様なり、巻首には居士自写の經巻断篇を収む、忌辰の配りものとして此写経甚だよくかなへり、居士の此写経ハ太だ佳を覚ゆ、其次に自筆の仕途日記三頁を掲ぐ、こハ明治元年

十一月幕吏を辞して野に下りし時自ら官歴を録しゝものなり、其次に皇朝二十四孝傳の稿本二頁を掲く、漢文にて自叙あるハ嘉永五年十二歳福地萬世識とあり、書き文ハ未成にて神童に列するの價あり、居士最初の著述といふ、其次に岳父荀庵の児肖像に題する七絶あり、此体居士に酷似し其人と弁別する難し、其次に居士の詩稿二頁を掲く星泓詩草といふ、星泓ハ居士が十五六歳の頃より二十五六歳まで用ひたる雅号といふ、詩ハ我丸と妓名を枕屏に録し以つて悶を排するの引ありて云

爾来墨水不繋舟、囊裏無銭奈個愁、漫将妓名題枕屏、夢魂猶擬到青楼

前詩云事頗似嘆窮矣、非余之本志也、仍畳題自解

何咲墨沱人絶舟、李観窮達不可愁、妓名題徙存孤枕、夢繞仲街旧酒楼

梅癡の名早く此時に起るといふべし、

次ぎに書簡若干を収む、一ハ文久元年居士竹内下野守に随行して外国に使せし時長崎より在る父の荀庵に送りたるもの也、巡航の所にて亜の形況等を詳記す、佛都巴里に撮影の写真八相ハ大小七枚あり、其二十歳の時とあり、次ぎは小遣帳の断簡を収む、慶応元年柴田日向守に随行して英佛に往きし時のものとあり、此帳を検するのお手当月三十七両

究とあり、次きに内子おしく究倫動かしたる者
詞を載す、夜に雅換あり、明治元年居士護府
、芝藩のお供を仰せ付られ、東海道を究てなる者
状より護府の大混雑、就ても手狭なるにて晩なし小屋
口預あり、さんなる由も也ある者を付いせらしハ上出来
と云ふてある、其次に奉使米国日記二三頁と
載せてある、尚明治十年東京日々新聞に記者として
西南の役に従軍し、大阪に帰りて内子に実のなる者
中天子様より目見いたし金五十円おめしなり
めん二度お銀の事を認めこんハお前にやるとあ
り、春日局の筆跡もあり、さんすハ西鶴も載す、
称するハ自笑其磧「聊須頃一」の語ある本あり、居士ハ

好んで平話を語りしと、尚印譜落款等あり、梅
田雲浜一代の事を其の文故を以て大略語らしむる箔向お
もしろし、余が曽架中にも荒干擁廬の文故あり
俳諧を評論し俳談に示したる文故のことさいハ此尚
みかくても可なることの、吉原の狎妓の筆に正誤文
を認めて後に柾新聞に寄せたるその余花すること
なれハ珍文故にこ、居士の生前余も南あて訪問して一枚ひハ
識論を耕いせ一枚ひハや説の材を称ふ、さん等の縁
故なし此の紀念帳を見るに甚の奥あり即ち大
要をここに採載すといふ　七月五日　記
○昨日同書を過り冊緑本一冊を得たり、甚だ惜し
おりしと思ふれあるしもしも義経記は伴いん奥州
（舞の本）

へたる陰の事を叙す、五十枚の流布本また頗る古雅
なることいふべきことなら惜むらくは巻尾一枚ニは何
人か補写しおけるも原本にあらざるが如し、且つ巻尾
に慶長十五年かのへ戌まさつきさくきまくつのえ
などあり、此書は英木の面目を見すれども寛永頃
の版かと思ふ、楢集博士手写本また例の廣文庫
に用ひたるらしく様々長たらしきものへあり、然れども
種の出雑今は甚得かたし　架中の珍とするに足
る

七月廿日　記

○片上伸氏突如早大教授を辞し日本を去つて露国に
赴く、人は此挙を目して種々附会の説をなせども原
因は意外の事にあらず、彼れ男色を好み、学生中

其母生れて居る二三を数ふ、而して其事実漸や
く暴露し、早稲田彼んと服せる教授及学生其の非
行を挙げて弾劾せんとするに当り徹底なる彼も
屈して身を日本を去るに至る、人は彼を目して危険な
る新思想を抱くといふ、其行は乃ち旧時の危険な
る鶏姦也、笑ふべし

同上記

○又た呂新吾の左の語を愛す

一 美生貪、貪生狎、狎生玩、玩生驕、驕生
悍、悍生死

一 不怕多感、只怕愛感、世之逐逐忘忘、皆愛
感者也

一 六合是個情世界、萬物生於情、死於情、

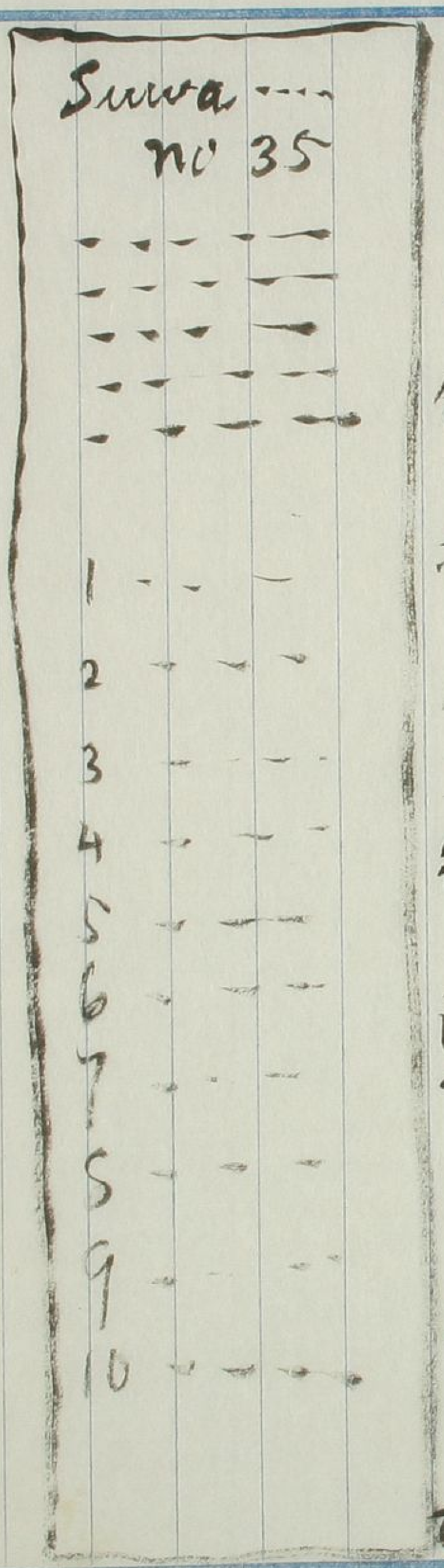
一 至人無法、聖人循法、君子制法、小人從法、各自責、則天地清寧、各相責、則天翻地覆

一 学生者大病痛只是器度小

一 山林處士、常養一個傲慢輕人之象、常積一腹痛憤不平之氣、此是大病痛

○佛典の百喩経を図譯しなるもの出づ、印度のエソップ物語の様なるものなれども、一種印度風の特徴あり、特徴ハ最愚を話資に供りしものあり、邦人従々此の譬喩を借り来り応用す、然れとも利巧ニ焼き直すか故に妙ならず、原作の妙ハ痴氣の裏ニ立つて存す

○英譯鬮を示すものあり藍色洋紙図の如きものに印刷しあるものにし、長崎の諏訪社境内にて発行するものといふ、壽[illegible]もあり、吉もあり、凶もあり、病なほるとか旅立てあしとか失へ物出るとか出ぬとか、すべて日本の鬮の語を譯しなるものなるが譯の甚だよし、折りて幅七分許ましにし上頭に糊してあり、十銭を投ずれば一紙を得べしと、流石に長



臨文と洋評の比となせり
○昨秋高島嘉右衛門に會す、高島の家に尺度を贈遺す、分子かり
す、頃日一青年拙書しを貫ひに来る、分子か少
じ益なかと問ふて、青年解する能はず、サてよし
と云ふ笑すべきか如きも、此頃の少年より尺度に録
尺分子尺あるを知らざるもの多し、メートル法の
実施後も困難なるあらさる歟　七月六日記
○近衛霞山公殁して二十年、今年二十祭を行ひ且つ公
の終焉之地に碑を建て其の除幕の式を行ふ、余も亦
與つる、公の邸宅は目白にあり、土地を分割せる為め、
旧邸跡と無く、終焉の碑を建てし所は、もと寝室
所在地と見ゆるを今はさら地なり、此の建碑は専

ら對支同志会員日人の手に成りしものにして故人は皆
対支那関係の連中なり、来会者百名計なりき、式後
テントに入りて茶菓の饗を受く、余か卓に主人文
麿公あり、犬養木堂、[illegible]田大塊、後藤新平の諸
豪あり、大塊か俳句を作る所から、俳句の談湧く、
木堂云ふ大塊を往きに蘭を画し、余に賛を求むし
いつも困るのは蘭か麦かわかりかねるので禁せが
出来ぬ、そこで讃をする前にまづこれは何かと問ふ
て而る後讃を書くなど云ふ、大塊は例のてつらう
いたづら、蘭の種類を究め経ともある、象か植
物学に深ってゐるのでぬものか、俺の蘭を彼是
評するは軽躁なりと威張る、後藤とあるは何し

やりますかと大塊問ふと後藤ハ其んな氣の利いたふ
ハやれませぬ、是非やらねバなるまい時ハ代作もするが
がある、其れに就き時に俺れの作らしくおしくマヅク
書つらふれと云ふ、之れを名づけてメンツ入の句と云ふ、併
しメンツ入ひもウマ過ぎると見へて、いつもやはり此の代
作を為(堅田を指すなるべし)とある、之れも後藤の作で
あるいと云ハれし事も云ふて呉ハせぬ、北席ハ元来
見へても為すに久しく振合ふて見るとなかなか先生ぬ 七月

無日録

此日領先生霞山公傳ハ工藤武重の編しである
工藤ハ嘗つて余が部下に業を採つた男であるが
久しく消息を知らなかつたが、初めて未だ生存

のるが知れた、印刷ハ我が活印刷合社で擔當し
たよめなることを知れた、
文麿公ハ稍顔霞山公と似す母堂に似るか、余が次男と同甲
也、余が初めて霞山公と會せしハ文麿公年輩の時
なりし
近衛公ハ多の蹟余多く知る、傳を見ても多く新聞のこ
とを見出す能ハず、但此公が殿る詳密日誌を録する
一癖ありしことハ備を俟つて初めて知る而して公の偽伏
料を日誌に取るならんなし
○前録片山伸の事を再説す、渠れハ男色を好むハ全く
狂的なり、愛情に出るにあらず、渠れ一人を犯して忽ち飽く
飽飽して而して他に移る、随つて被害者多し、飽かれたる

女の絶かんばかりに止まらずして虐待を受く、彼れハ嫉
に採點としも公平を失し、飽きたるものを殊に悪み之れを
採點にあらハすまである、彼れハ狂的血統あり、親も狂し
弟も亦狂す、彼れの狂暴ハ血統の然らしむる所に、少
くからく露西亜にハ男色盛んなると、彼れの露西亜にゆく
ぬより女の趣味の犠牲者を得ん歟、惜しき男に彼れ
も遂に此の狂的行為を以つて死せん歟
七月六日記

○此の一句間歯痛に困しみ物を嚙む能はざり、偶
衆議院議員と當選しゐる石塚氏目下臨時議會
開會に際し帝都に来り、遠からぬ御用あるも医療
機械を取寄せ、阪上弘蔵宅の三階の一室を治療室
に充て、昨日余のうたれし齲歯を治す、上左の臼歯二個

を取去る、歯根に膿瘍二三生じあり、施術の際注射
を例のごとく施せども、いつものごとく其に利かず、常に信
して漸やく效あり、甚だ面倒なる施術を経て漸や
く快を覚ふ、數日何物をも嚙む能はざりし衣食の
歯漸やく働きを為す、實ハ昨年帰省の節にも此歯
他の痛歯の治療を石塚に請ひ時日無りしため此歯
に及ぶ能はざりしが、果して此歯終に辭ふべからざるに
至る、
七月六日記

○雪人と俳名を信州出身にて俳句も書も其人のごとく
超脱、書こふへしと御報せきしが、此人山田寒山と
刻印をなしゆきて正平なる短冊二枚贈られ初め
て其書を一読す、絶する品おもしろきものなり　眼

部耕花も亡人と延慶なりとて、いろ〳〵語る、ある時雪人
木彫の芭蕉の肖像を何れよりか購ひ得て一時愛玩
し漸やく酒資に窮し、之れを佛冷に売らんとし、其
の仲徐を耕花に依頼して云く、芭蕉ハ三円五十銭に購
ひたるものなれとも、君などの人を仲徐者とし佛冷などの
人に売らんとするなれ、三円五十銭などといふ價ハ無禮なれ
ちかし、十円と云ハヽ先つ可ならんことといふ、耕花笑
つて之れを佛冷に示し、雪人の言ひしことく告く、佛
冷曰く、三円五十銭のものを十円に買ふハ愚なるが如し
と雖も、持主の意を汲まば深更まで酒を飲まんて
其意の合ふかるん、これを思へバ、十円に買ふハ安か
賢なりとも購ひ入れなりと、日扨て此の十円を得て雪

人更に耕花に謝して曰く、幸ひに酒資を得たれバ、これ
より君と共に忍川に行き一杯を傾けんと思ふなれ
ハ就て君に纏頭致すべく、此の十円の内五円丈ハ別
に見舞あり、願くハ僕を監督して五円の丈勘定の
済む丈計りひありたしと、耕花曰く、吾れハ酒を嗜
まず、若まわるこそが君と共にゆき五円を喰ひ込む
ハ無益なり、君ひとり行くべしと勧む、雪人いふ、自
分丈行けば全部遣ひ払ふハ必然なり、君に附添
を乞ふハ此故なりと、纏ひ云ふに耕花も辞し得ず
吾れと室を告げ葉ぎに行かんと忍川に至り、女将に融
と頼み此人の勘定を五円までに済ますべし、若し
以上飲ます可からずと頼み置きて帰りたれバ、雪人を托し

し、容かに帰りけることありしと、雪人の呼吸はおよそ斯の
如く恬澹釋氣あり。赤貧を守つて晏如たる所古人の
面目ありと　　七月廿日記
此人の句に
業以前と再案なしと注す
涼しさや室切以来松の風
大龍現す雲の中

○耕石此頃信州を漫遊して帰り、浦里村大法寺にて國寶
佛像建造物などを見たることを云ひ、且つ展觀したる古
文書中に正徳年中の建築見積書あり、そが中に竹
釘弐斗五升代金七匁とありけるを見ておもしろ
く覚えたりしにや、翁一茶と太節は同時代の俳人なれ

ども太節は一着を一茶に譲りたりと云ふ一派を起し、若し
一茶太節の門下に遊びしことあり、太節は一茶某に
と申すべき心得ならんか我庵に訪ひ来るならんと欲し
外出を見合せ待ちたれど遂に来らず、翁これ一茶
の動静を探りしに、既に此方に向ひて立去りしと申すべき
急ぎ起ちて追跡したるに某駅にて追及したり、一茶
に就て何かと挨拶を述べ語らひけるに、さらしやと問ふに一
茶は平然として態と音連れたるにもの、問ひもなかり
しなれと答へ、太節が心待ちに待ちたるは既に一着
を譲りたるなり、其者を申すべき跡を追ひたるは更に又
一着を輸したるなり、更にまた一茶に負ぬる問ひもなかり
りしと云はれて又更にまた一着を輸したり、されば太節の氣

七月六日志るす

太郎七錦勢晩に左の日も未しかりく是非棋を囲ん
さんよと隣も自庵に伴ひ来り、ま以まま四五番打ちけ
ゐれば、さん恒例ハ連句を詠ふ訳なれど、負
け続けれ負けるも口惜しと、自庵に伴ひ来りなから
團恒例に擬るをせず、酒など吸んで庭に入り、太郎
ハ机を出しれ何か写しかけの書きものを初めたり、
一茶ハまづ枕に就かず、机辺とまりの襖きここみの
を写さる、やと問ふれ、太郎犯るもりと云ふを写さき、
一茶ハ然んハ西向し、君んまも写させよと二三枚助
筆をしけりとあり、一茶の面目見るがごとし、太郎
七番終こハ我を打り通留数日の間すへ終に連句を
詠ふまるもなきことこま全局の敗を取りたりといふ

天和運

菓類で落ち来るいろ〳〵のうすく肉例のことを録助
の念ふごとき蔭に二三を収めおく。閻魔の護府
ハ閻魔銃除の明るの家杉山集るも閻魔めくり
と云ふ書を出して寄せ来りとるもの、標語を前冊
に収めおきたるが、こんなポスターを絵定しとるあ

近刊の図書館協会雑誌に載せとりしもの也
日大阪に行んである電車従業員の同盟罷業ハ十数
日に亘つて未だに落着せぬ。阪地の交通の杜絶困
一方ならず、学生や会社員や軍人などが電車を発来
ずく操縦して一部分の運転をやりておる状態であ
る。欧羅巴大戦後英国で同盟罷工が起つて一時
市民が電車鉄道の運転を掌つたことをやえ
れのをツイ先頃の事の様に思つてゐるが早く日本
も同じことが実現されたるは罷工同盟で分案
外務省でもあるものも云ふおある、そこのもの罷工も但
職個ところで来ない。今度の作戦で自分が感心し
たのハ同盟罷業者を悉く高野山へ押しこめ

○佛蘭西一等功佛國製銅牌十枚を贈る、

皆な円形径一寸七分許のものにて黄銅を材とし薄肉リーフにて人物を刻りたるものなり、図はいろ〳〵なれども、概して遊戯の図なり、曰ボウリングあり、打毬あり、テニスあり、競走あり、射撃あり、障害競争あり、裏面に月桂冠を刻せり、但し遊戯ならぬもの二あり、一は帽を戴ける青年を刻す、背面に円形の稲穂を刻したれば何となく早稲田を徴象したるらしき趣あり、他の一は女子を刻し、背面に山羊と猫の牧童を刻せる、一二の牌にはヘンリー、ドロプシーの名を刻す、刻者の名と思はる、此種のものを刻するの人我邦にも 畑正吉のごとき人あれども、流

在て外人ハ此道て長ず、十個各々話を異にして氣
くの味を写さず、東錦に陳列して玩弄し甚だ
く愚を忘る

七月十二日 池

○芝の新寄席を会場として高田前座と余が互ひに会
主となりて催す三人会といふがあつて一昨年頃から継続
してゐる。読手も話手も話を吐くのが銘意で あ
外に深い意味ハないが、此会ハ会場を結びつけてあ
ゐの統味のあるといふのも、此楼ハ吾等の無気時代
るハよく遊人が此窓で、ここ迄来ると荒い時分の縣
想が続いて一種の情緒が漂ふ。吾等の無気時代
に此楼の美人の業顔をとくへられ女ハ既に五十
を越えてゐるがまだ踊りの師匠として此楼にゐ

る。いつも三人会でハ此めが幹事格で斡旋するので
破格の我儘をやることが出来る。これも興味の一つで
ある。もし一つの興味と称ふべきハ他の二人にハ無い自
分丈の興味である。自分ハ無気時代に此めに恋
したことがある。その恋ハ實のない泡沫の様なもので
あつたが、その恋が連續してゐる。自分を此めと呼ん
と恋人といふてゐる。まだ高田前座ハも四十年遂
げないといふてゐる。遂げない恋ここにつらい恋で
ある。四十年間の恋ここに長い恋ひである。若し遂げれ
ならば今まひないろいろの憂患もあつたであらう、
或ハ今日時々見ることも出来ない様になつたかも
知れぬ。遂げない恋これが四十年も續いてゐる

のかも知れぬとは、折りに振れて此女の目前に言ふことで
あるが、もう我れも彼れも老いた、老いても情は同じことで
ある、當初から熱しないから續いてゐるのかも知れ
ぬ、若し熱しようとすると今は冷却したかも知れぬ、自分
の経歴中には珍らしい恋である、女はこうした
恋は必ずしも珍らしくないであらう、彼女は陰性
であるから、併し彼れの感情も自分と同一であると
見へる、醉後動もすると温い手で余が手を握る、
他の若い女に戯れることがあると、嫉妬を起して
妨げをする、面白くあるとなると寧があるぢやありま
せんかと、彼れは公然斯くまでいふ、而して恋は危く
幻影のごとくきゆるのである、嗚呼老者の恋、つらき

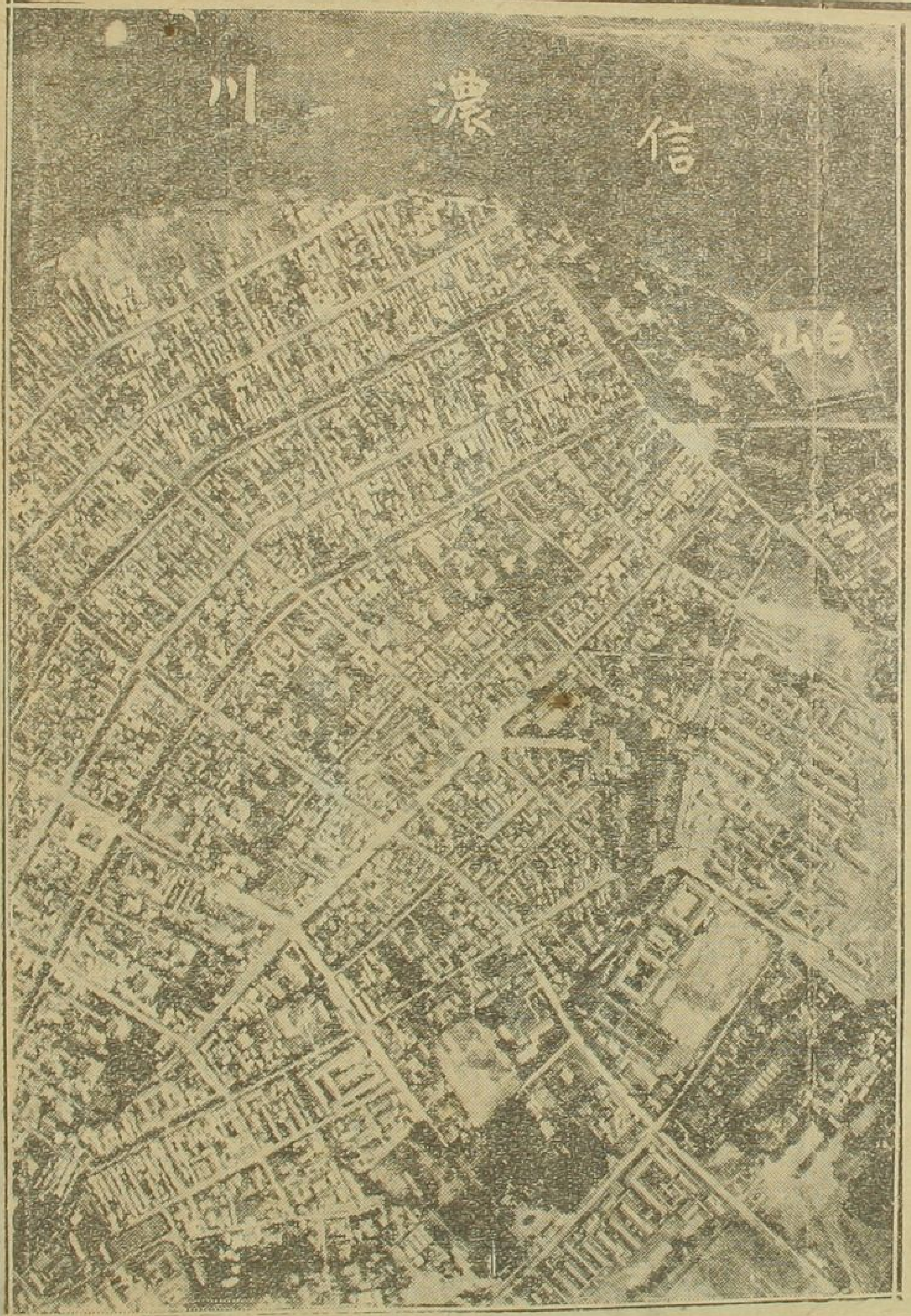
がやれ聊か自惚もある、三人會で最も多くの興味
を占斷するものは矢張余である、一笑、
○昔熱を忍んで昨日に大隈侯傳記の稿を讀
んでみる、高須梅渓執筆の第五期、此部分原稿
約千枚、此期に於ける侯の事蹟は伊隈聯合内閣
を作りたること、憲政本党の総理となりたる後に辭し
たることの外、格別觀るべき事績なし、但し日露戦
役も此際にありたれど侯は開戦の人ならし、最も初
此戦の結果を高く嘱望し晴、或は記する所を
誡することなきやと氣遣ひしくらいなれど、讀みて見れば
あまりに記事豊富なら、侯が日露開戦と見たら
輿論を如何に指導せしや、開戦後侯が如何に酒

民を鼓舞作興せるや、戦勝後侯か如何に国民に大
なる警告を與へたるや、憲政本党総理を辞して
以来、自由の身を以て如何に国際的に大なる働き
をなせしや、早稲田大学の総長に任する前後に於ける文
的運動を起して一世を提撕するに如何に努力したる
や、およそ此等の侯の言論ハ悉く録されて多く[illegible]
遺されたるもの[illegible]井然たる理路あり、其の無冠
の外相として国家に貢献したる始終ハ燦として
侯の偉を飾りしものあり、侯の事績ハ在野の地位
に於て光彩陸離たるものあり、他の多くの政治家
ハ其の権力を離るれハ其の事績の録すへきこと概して
無きを常とするも、侯に於ては決して然らす、これ侯

の他の官僚政治家と其選を異にするものありて西
洋式政治家と其軌を一にするもの、唯独り侯ある
のみ、此の主期最も之れを証する也　七月十三日記
侯の言説ハ在野の時に於て最も多いのも偶然ならさるへし、蓋し
かゝる何かをか録されてゐるからか、材料が如何にも豊富
であるが、侯ハ生涯善を親しき人びとある、随つて叢
を取つて演する時間丈を言説に費しいく譯じかく
一層言説が多いと人ハ或ハ侯を以て弁を
好むものとなすし、出鱈目をとくなると云ふ人もあるが
此の偏見なる決して然らさることを理解するん
あらう、侯が因襲的思想の殻を破り胸間に湧くの思
想ハ、侯の多年を以てしも云ひ尽し得さるいわゆ

崇高であることが此伝記によりて分明する、
併し旅中の言説などが餘りに多きに失し、輙もすれば
雑ならしむる嫌ひがある、國家の大事件に對し侯
の言動の記事と長短の權衡を失することとき
ことハ侯の傳記を統一する上に於て注意を要
する、但し國家に關する記事ハ他の歴史にも
乗る事であるから、侯の傳に略しても差支な
いとする理由もあるが、侯のいろ〳〵の場合の言
説ハ之れを此傳に漏らせば、永久棄たる損失も
あるから、此點も一考を要する。
侯の傳記ハ侯自身の言説が速記のまゝ材
料となつて居ることであるが日本の政治家の傳の内

其の決して無い、侯が西洋政治家と其の為す所
が同じい點から、其傳も西洋政治家の其れのご
とくなるのであるが、これが侯の傳の特徴であつ
て侯の誇りとなすべき所であらう。
○日々若干の圖畫を購ふを以つて日課の如くしてゐ
る自分ハ此今の如き酷暑にハ圖書も旱魃で渇
を醫しかねてゐる、此ほど一小畫冊を齎らし来
るものあり、所謂ヨ三帖といふものにて其の小形なる
愛すべし、巻首三洲の緒言の題字あり梅〆の描
と題詩あり柳圃の山水あり廣瀬青村の詩あり環翠
の月瀬の圖あり山嶽の樹ひの鶴耕花の盆景二
洲の松逸山水日高鉄翁の梅蘭墨清蔵の果



★飛機上から見た新潟市

先日飛來せる軍用飛行機が三千米突の上空から新潟市を撮影せるもの（上左側の白□印は本社、下は沼垂着陸地）

梅崎俊也先生 御不康なれども腕下の清風の涼味を賜
小僕の為に商貴き今日之を寄せし、これを寄贈しと云
ふ可とす、机案に置いて時々展観す、臥游山水、
腕下清風の去来を覚ふ

七月十四日記

此帖中会心の作は小品の録 環翠の
梅溪三洲の山水などである、紙は小さく画が大きく
見へる者に妙味がある 巻首三洲の題字は
己卯二月の題識がある、此帖の成つた時が
およそ知れる

○前頁に古郷諏訪神社に文課されし蘭のあること
を記しれが其後古郷の友人より五六寄せて来れ
一枚十銭と前頁に書いしのを誤りで一銭を投ずれ
ば一紙を得べしといふ

○此年の震災以来東京の市街の地盤が甚だ脆
弱であることが分り、殊に江戸の地盤の脆弱
であるは何故であらうと調べて見ると、意外の外
は皆是天正慶長年の埋立地であることが知
れ、地震学者は旧東京図と埋立年度を参
くの地に記して、各所の震害を測量して
是れと配合比較して見ると、古への埋立地が震害
度が多いことを発見しれ、然るに記念
すべきである、実に東京は埋立地の多いところ
は当時は慶長年間家康の江戸に入った頃の
状態は何と云ふに僅かに山の手及び神田本郷
芝等の其他のところ島が完から島嶼の

ことごとく連亘屹立して、南面をすべて海であつた、即ち
京橋や日本橋辺は海浜で、蘆葦生ひ茂れる池の低
地も多くは泥であつたら、之が高処から早く埋立られ
のは当然のことすべきである、今東京市が論ぜられ
江戸市街修築表を掲ぐると大略左のごとくである

一 天正十八年、鳥越村人に命じ姫池千束池を填めしむ、

一 慶長八年、諸侯に命じ千石毎に人夫一人を課し神田山(駿河台)を剗りて東南海洲を埋立ること三十四町余、北は又日比谷入江を埋む、濱町八丁堀以南銀座辺の地域

一 元和三年、庄司甚右衛門請ひて日本橋東の沼池を埋め、遊廓を開く

一 寛永元年、僧霊山、日本橋東の海洲を填築して寺を建て、後深川に移る、即ち霊岸島

一 寛永十年、南鍋町三丁目北側を埋め町家とす

一 寛永十六年、大役市人の請を許し海辺を埋めて宅地となさしむ、芝濱辺なるべし

一 寛永中、是より先江戸近海に来り漁しつゝありし摂州佃村漁戸、大川口の洲渚に移住し、三四島を佃島と改めて埋立て

正保元年家を建つ

一 大僧正天海不忍池に二島を築きて竹生島に擬し弁財天祠を建つ

一 承応三年神田橋、数寄屋橋等の城濠を浚へ其附近を埋立つ

一 万治元年木挽町海洲の填築成る今の築地是なり、赤坂の卑地、小日向の湿地填築

一 万治二年、神田川堀割の揚土を以て小石川小日向等の新地を築成す、徳川綱重に木挽町海上一万五千坪を賜ひ、填築して別墅となさしむ、今の浜離宮の地

一 本所深川鉄砲洲等作園の地を填築して市街とし、本所築地なりを置く、鉄砲洲は佃島の田西に並ひ居る洲渚にして、幕府の砲隊士井上稲富二氏の火技演習の地なりしを、此時栗山京寺命を奉して填築し市街となる、深川は初め海西の一洲にして漸く洲渚を成して永代島と同じくなりしかば、伊勢の人深川八郎右衛門新墾して慶長元年深川村と命名し、其後次第に填築する所ありたり(以下略)

一 元禄十年秋田利左衛門等四人請うて永代八幡社東の入船洲渚十五万坪を塵捨場として之を埋め、成るに及ひて木場と称す

一 正徳三年秋田氏の後其扇橋町東洲崎十萬坪を請負ひて荻捨場とし之を新墾して千田新田とす、後又其南六萬坪を請負ひて開墾し享保十三年成る石小田新田是也

一 享保十五年、越中島信濃洲崎荻捨場の、寶暦六年ならむ、僧曽融等開て曽融新田とす

一 享保十九年秋田氏又曽融新田の東を荻捨場とす、元禄以来秋田氏埋立る所三十八万坪

一 延享四年不忍池新築地成る

一 明和二年、平井満右エ門深川洲崎東に汐除土手を築き新に二十萬坪の地を開く、即平井新田

一 明和三年霊岸島埋立地成る俗に蒟蒻島と称す

一 安永八年、小網町新地築立成る

一 文政中、享保以来越中島洲崎を埋むるもの四番組埋

徳川氏入府以来明治近くまで江戸の埋立の大略は以上のことくで割合に早く且つ広い面積が埋立てられたことが此表で窺はれる、霸府の地と定まつたから、茲に埋立てに精力を集注したと謂ふ譯でもあるが、後年要害を擁する（?）業地は皆る埋立地であることを考へると東海の濱と称へさる感がある。思ふに江戸ほど陸地上に大なる変化を生じた所は他に多く例を見ないのであらう。徳川入府

以前のことはよくもわからんが、太田道灌時代から徳川
時代迄の間には、陸地の変化は可なりあつたのであらう、元
来利根荒川二川の流出して居る所であつて、みる〳〵関係から年
々氾濫流下する河泥の為めに陸地の現出を見たものも
もあるらしいのである、ヅツト昔しに溯ると大森
から高輪芝あたりの高地丈けに人が住し、其の高地が
直ちに海に面し接した地形であつたことは、此等地方
から貝其他海産を食料とした人間の遺跡が追々
発見されるので略々推量がつく。上代歌人が武
野は月の入るべき峯もなし、尾花が末にかゝる白雲と
口吟んだごとく、武蔵野一帯は茫漠たる葭
生の退潮の地であつたのである、夫れが僅かに三百数十

年の間に全然埋立られたが、そして其の地が此年
の大地震に主として大害を蒙つたことを考へると、
おのづから避け難い理由がある様に思ふ。
偶々明治四十五年日本橋を改築した際に紀
念として出版された、日本橋志を読むと、本
文に引いた江戸修築表が収めてあつた為
は日本橋の昔時をいろ〳〵読つてある中に
目から見ると物珍しく感じる一事が載せて
ある、其れは才市である、其れは左のことを
記されてある
日本橋では毎年十二月晦日に開かれた才
市と称するもので、賑ふ其の様のことである

○江戸ッ子、即ち新しい各家を廻る萬歳と従ひ、鼓を
持って共に舞ひ踊る才花が、比橋の南詰
にして、三河から来る三河萬歳し抱へらん
るのを待て居る市であるが、萬歳が抱へ主は
才花ハ其為因縁ニ其家ニ撰(選)擇されん
連れ行かれた、ものか之れハ純粋の市
であるが、萬歳にと同じく抱 転便ひあ
つたものである

花る鼓志らべである　志まるのき
顔が位のする才　花の市
曲亭馬琴の「俳諧歳時記栞草」に云く
「萬歳市　江戸日本橋の東二町ヒラ

四日市にありて三河萬歳江戸に来りて脇士
の才蔵を傭ふなり、毎年四日市にこの
傭を定めて傭ふと云ふ、之を萬歳市
といふとぞ　　七月廿五日録

○江戸三名物なるべきハ芝居と魚河岸と吉原
なり、之を一所にて、流水の川柳に云く
日に三箱鼻の上下(目と口芝居と魚)臍
の下
三箱とて三千両也
江戸の道路の悪かりしことハ昔しハ尚更なりしな
らん昔より言ひ習はされし集に云く
見しハ今、江戸町の道、雨ふれば降りぬかるみ泥

漂うして往来あるきかねさる程に、足許の塵の
高きを時人好めりし　江戸の人は泥濘を好
む・・・海道を眺め居しは、通る人を見ん心、新
しき小袖を折り目高なる上下を着、道のぬ
かりをたどり行きしが、前より馬と碌と行き
逢ひ、蹴上の泥を厭ひ避けて、泥水を比
人に思ひ居しを浴せける。
芝居を見ふかれ名日枕ある
日本橋何里くの名付おや
更る夜しおく霜もすぐ日本橋　其乙
◯日本橋志やさおもしろく見へる訳は将軍
家が船で此の橋下を通行する時のことである

将軍家が此橋下を通行さんる事があへ此のは
甚る面白い事でもある。これへ主は将軍が濱御
殿へ赴かせられし時が其時ひが定まると二三
日前から、日本橋川並、御通行となる川ハ助の
碇泊船ハ悪く他に移されることになってみた
併し此規則も魚河岸の平田船のみハ通行相
せられなかつた、理由としては船筆の租税を冥
加として居たからであると云ふ。金を取ると
日本橋通りハ何でも三町光の往来止めとある
南詰では通三丁目まで、北詰では室町三丁目ま
で、其外横町等ハ日枕であつた。将軍の乗船
地ハ龍の口と一石橋際の二個所にあつた。

大城に御誕生になつた将軍と、支葉を入て将軍職を継がれた方とハ、其場所が異つて居たのである。

将軍来御の場所ハ何れも「お揚り場」と俗に称へて居たそうで、大城誕生の方ハ龍の口、他ハ一石橋際であつた。御産湯御の時も同様であるが、御座船が日本橋下に差しかゝる時ハ、江戸橋南北の通行止めハ解かずにゐることになつてゐたのであるが、橋上から将軍の御座船を見てハ由々敷ことゝて橋上の通行ハ暫時人払であつたといふ。又日本橋の通行止めも、御通過後すれバ何もでなく解かれて諸人の通行自由であつたとのことである。

〇版の彫刻に就て或る刻家の語る所を一二あげると、享保あたりの〇義ハ忘れたるも、版刻の版の存してゐるのを見ると、大体頗る深彫りである、何れのを比へて見ると、彫り方が後世と違つて、後世ハ刀を先づ字や画の輪廓に着け、餘白の所ハいくらでも浚らうが例とするで大体浅彫りであるが、昔しハ字や画の輪廓に先づ刀を着けず、餘白の中央にハ刀を入れて周囲に広げを彫つてゆくのを例とした。後世ものハいくらか骨も折れ、敏速も欠いたけれどもである。或る家の語るのを聞くに版を彫る時ハ先づ正しく版木を机案の上に置き、字も画も正しい

従（實）地に當りて刀を揮ふことを常例とした言
ひ換れバ、校木を顛倒すれバ鑿りやすくあつた
も決してそれをせぬことが法をまもつてゐた。これバ形
式に拘つてみるかの如くにも見へるが、それハ譯でハ
なく斯くして鑿らせバ、倒る場合にも墨し
た定めも出来る。倒毛りサバキもよろしく、随つて倒つ
た結果がよろしかつたといふ。又今でハ写真（湿
板）で写したのを、ガラスらハがしてそれを板に張
りつけるのだが、このハガシタ湿版ハ（写）薬きを當ぶ
落く写すのもこれをハカスのも目するの的手際を
要するといふ。理屈からいふと色版を弐枚か
化して同じ物を写真で弐枚か写し、それを色に

れくの版の仕絵ゝ完つたならバよい様であるが、実際ハ
畢竟同し物を五枚写せハ五枚共多少の相違があ
るので無雑作に同し物を同し時に写したからと云つて
それを依頼するとドンダ喰違が生ずるといふ、然るに
同じ今く時を同じくしたらよいくらゐ以上ハいくらか
の違ハあるのが当然である。彫師が唯之を写をつくる依
頼せず、実物を借らうて置て之れに則るのハ此故であ
る。而して本家の言ふ処に據ると木版彫刻ハ最早
復興が出来ぬ、或る説ハ其の衰微を防ぐ為め
の特別保護を要するといふけれども、それなこと
でハ迚も維持が出来ぬ。昔しハ五年七年の年期
小僧から打込んだから、其の習熟が一の名技となり

ことである、其の年期奉公も今の時代に実行が出来ず、年期奉公にあらずとも、五年七年の修業が今はとても出来ぬ。そこへ保護するものがあってもまあまあ気が続かぬ。であるから進んで維持は困難である、要するに此の者の持続は先ず一も生活問題にのみ繋ってゐるのであると云ふ也

七月十七日録

の感あり、実に収めおく　　七月十七日記

○近世文人の印譜ハいろいろ出てゐるが比較的少なくして手に入り難きのは梁川星巌の印譜である、自分ハ略々近世諸家の印譜を収蔵してゐるが、架中未だ此の印譜が無い、藝苑叢書の内に模刻して入れたのもあるが、可成ハ原印を捺したのが欲しい、此頃偶ゝ一部雨還本が坊間に見当つた、見ると巻末に張氏秋葉の詩があつて其の題詞に鳩居堂で製したことが載つてゐる、如何にも印箋ハ今も鳩居堂と印譜本と同じてゐる股目うきつてある、収めてある印ハ案外に多く、星巌も印に趣味があつた様にも思ハる、締りこある

といふので出精ハ高値を唱く、雨還を終了し製本

とは三重し候へまひ此ともそ見るとヤスからぬこの上なつた。講中に来谷の此と覚しきこあか　尤も多く見ゆる

七月十八日

○団十郎十八番の一である矢の根五郎への何から思ひついたらうといふに、神田の佐柄木町に幕府の研師で佐柄木弥太郎といふがあつた、享保の頃の弥太郎ハ洒落好で市川の二代団十郎と常に出入してゐた、或る年の霄に団十郎が年頭に此家に行くと、丁度同家でハ吉例の研初式（とぎぞめ）をやつてゐた、弥太郎ハ熨斗目麻裃をつけ一段高い所の床几に腰を卸し、先づ肩衣を両方ともに外し、太い襷を十文字に綾（あや）とつて大雁股（かりまた）の矢を一筋とつて大砥石に向かひ、動揺大加え酒器に研磨するの状を為して式を終るのである、此の様子

誇張された儀式を傍観したる團十郎は、其意氣が
人形振りから男達せし経緯を傳へ殊に市川家
の恥辱と歎息相通ずる所あるを見逃さず
つひ、そこで佐柄木家の許を得て矢の根五郎の一
幕を仕組み春狂言に出したところ大いに人氣を
投じたので、爾来十八番の内に加へることになつ
たといふ

○昔し江戸の神田五軒町に野州黒羽根の領主大関侯
は早い頃からの欧風心醉者で外國の寫真を船大工に
突つけて無恰好なボートを作らせ、オールを操る
ことを秘訣として登城の際は自分オールを執つて
神田川を往復し、或は奥方を馬の上へ横に乗せ自分

も轡を並べて市中を散歩してあるいた、江戸子は之を
嘲して市中を馬で乗り廻し異人の真似する馬鹿の大
関と云ふ落首を流行させた、

詒情樓

案ずるに

一此印材白玉震火に罹りしものと印面
無事し會津八一より贈らる、前日
同人より贈られし白扇に題せし亦震火
にかゝりたるもの、共に架中に存し
大福佳念となすべし
此印(鈕)鈕は火を経て潤澤を失ひし
丸と色変せず、玉の特徴は火を経て
(亀裂を生せず)ぞ知る

詒と怡と音相
通す
詒は恐らく喜こぶの意ならん

○呉服屋白木の先代までは相當な人格者があつて一種の家憲を作り正直、勤勉の二大標語を用墨にまで刷出して日常店員の心にしみこませるやうにし又かするとかいふ言葉を忌むの餘り、白木屋に限り昔から絣の仕着せを店員に着せないことになつてゐるといふ、

○外國へ行く時の渡航免状の書式は、今は簡單のものであるが、徳川末葉頃の免状は隨分お節介なことが箇々しく書かれてあつたといふ、外人から借金する事、借金しては返濟金して物出せよ、日本人同士深切を盡くせ、外人を殺傷してはならぬ、他國の國籍に入つてはならぬ、宗教を改めてはならぬといふごとき煩瑣なものであつたといふ、どこかに原本が存してゐるだらうが、見たいものである、

○小川町の少し手前の右側即ち雉子町の井上洋服店の辺から宮本仲の邊は江戸時代に堀丹後守の屋敷のあつた跡で、其向ふ側の中川牛肉店の界隈を丹後殿前、一名丹前と稱し、當時は湯女風呂が軒を並べて嫖客を呼んでゐた、此丹前風呂に通ふことが一種江戸前の粋とか侠とか云はれたものと考へては昔の感にたへぬ、

○神田の名物をあげれば神田川の鰻は文化年間今から五代前の神田川の主人が松坂神田村から江戸へ出て来て外神田仲町加賀原の前へ深川屋といふ鰻屋を開

いふのが始めで、阿古屋が出身地の神田村と母方の姓の宇
田川を結び合はせて神田川なる屋号を命じたので、
居住地の地名から来たのではないと云ふ、此家の評判を博したのは
主として味噌汁の加減であるといふ、丁度業当時の主人は
自分が苦心して作った味汁は毎日後から補して末代まで
も保存することを遺言したので今も其の家憲を
守って続けるといふ、樽の中には文化年間から貯
へられた味汁は恰も醤油のやうに濃くなってゐる。是が神田
川の財産で、夫れ丈けだから去へば主人は何を措いても
此の味汁の樽を捧げて避難するといふことである

○明治二十年四月二十日鹿鳴館で催したる仮装会は

昔し語りとなる、それは仮装を催したがやつれたか何る人が
少なくない、それは左の如くである。先づ井上外相は毘沙門天
山縣内相は小具足を帯び槍を抱いて荻原広能、
大山陸相は羅紗の羽織に野袴を穿き天性の無
器用で別と云ふ事が無いから、時々人混の中に立止り、
天井を仰いで「私は薩摩の大山弥助でゴハす」と大呼
したのは又出来出す、下田歌子は源氏物語の夕顔となって
内外顕官を悩殺した揚句、伊藤首相の腕に任れて
卒倒し、大隈首相の後人につれた、渋沢子の令嬢琴子
は其の役で、老人を山吹の里の女に仕立て、自分は
将装束の太田道灌に化け、伊藤首相の令嬢末
子は其の井上孫と他子は老人を同生子末松夫人とが

暖簾をつけた松風村菊と云つた狂人河内彼の夢
是も赤夢とあつた、
○加賀の前田侯から雪の献上と云ふことが江戸大奥に於ける年中行事の一つであつたといふ、これは今各分科大学の建つてゐる處の空地に大きな窖を掘り桐の箱へ献上の雪をつめて、其の周囲を非常な多量の雪で密封して春を越し陰暦七月の土用になると穴をひらき周囲の雪を除いて[illegible]の雪を将軍家へ献上するのが例であつたといふ
○難町迄内の地名の由来二三を摘記すると、呉服橋は橋外に呉服師後藤縫殿助の宅があつたので一名後藤橋とも云ふた、数寄屋橋と元数寄屋町ハ織田有

樂斎長益といふ茶人が居たからの名、半蔵門ハ拘頭役服部半蔵正成の配下の屋敷を置いたからで、八代河岸即ち今の八重洲町ハ、ヤヨウスと云ふ和蘭人が居住し南蛮寺と呼ばれる耶蘇会堂などがあつたからで、参謀本部下の弁慶堀赤坂の弁慶橋は京都の大工弁慶小左衛門に因んだ名、三年坂は昔薬王山三念寺があつた名残りで三念坂でもあつたのが寺が[illegible]移つて三年坂と呼ぶ様になつた
○今の商科大学のある所其の向側、即ち[illegible]が営つて入つた[illegible]橋から東京大学のあつたあたりしハ護持院が原と云ふた、即ち五代将軍綱吉

の時に僧隆光の建立した護持院と云ふ大伽藍がこゝに
立てられたが、享保年間其寺が小石川護国寺に移さ
れて以来、此の原の名を以つて呼んだ。此隆光ハ僧侶の
生母桂昌院の寵を得て大僧正とまでなつたが、一人ハ
北の僧を露西亜の帝政の末路に暗殺された妖僧
ラプスチーンを和製にした様な坊主頭だと云ひ、ひとみる桂
昌院とおかしな関係があつたとさへ云はれてゐる。桂
昌院ハ元来京都の八百屋仁左衛門の二女でお玉と云ひ
春日局が連れて殿中まで入れ家光の寵を得て綱吉
を生んだのである。何分隆光を寵したかといふ其訳
が嘗つてお玉をよく悩ましたと、壹をとられたのを
思ひ出し、其の弟子らしき此僧を近づけたのだと云はれ

てゐる。（以上江戸に関する数項矢田挿雲の「江戸から東
京へ」より抄出）

七月十八日記

○昨夜松波博士（仁一郎）と徳田総領事を迎へて大隈会
館に文明協会の時局講演会を催した。案外に冷しかつ
たが、蚊の多いのと話の長いのに閉口した。会を閉ぢ
たのハ十時半を過ぎた。松波ハ海法会議に臨んだ
話いた事などを語つた。内に、此会議の主題とも云ふ
べきものが二つあつたといふ。一つハ英国の提議で、すべて
船客に保険を附さんと云ふ案が出た。松波の云ふ所
によれば之に進んだことハまだ日本では賛成しかね
た。他国も賛成を躊躇したので終に潰れた。今一つの
案ハ甲艦と商船と衝突した場合、従来ハ軍艦ヌ

のみ重きを置き、軍艦が破損すれバ商船ハ賠償
せしむる事となつて居る商船が破損しても
軍艦ハ賠償の責任がない、それハ不公平なことゆへ
無いはずで、今まで双方同じ責任があることになつたこれ
ハ松波が往年同じ様な会議で主張したこともあつたれ
ど其頃ハ誰れも耳を傾けるものが無かつた然るに今
此の提議を見れバ、会議中ハ某国委員等ハ賠償の
満たまで商船を抑留すると同じく軍艦も抑留せ
さんバ徹底せぬと云ふものもあつた、之に對し松波ハ
軍艦ハ国の信用を繫げて居るものであるから、そんな
无礼をするにハ及ぶまいと云はれたところ、中にハ独
この様ないくら約束をしても果さぬ国もある

など云ふて反對したが、アメリカが日本と同意したの
で日本側の云ふ通りになつたけれど諸つたのが外国人も
随分ツマランことを言ふものだと思つた。縫田ハ早
大出身で日置の女婿である、昨年大震災の前日
波斯視察の官命を帯び日本を出発し、波斯と
三ケ月滞在していろいろ調べた話を二時間餘も
立つて其の詳を悉した。波斯ハ今尚ほ無條約国
である、往年榎本武揚が露国でペルシヤ皇帝と
過した時條約国たらんことを欲する書面が表面さ
れたるも爾来外務省の問題となつてゐるが、そ
れが埒明かず今日に及んでゐる、畢竟治外法権を
ペルシヤが喜ばないので運ばないのである。縫田が

ならば国清視察に出られたのも條約締結に努めん
為めであつた、ペルシヤは昔しは文化の進んだ国
であつたが、回教を国教としてゐる以上は萎靡
して振はない、殊に去る間露西亜の壓迫を受けて
ゐたのだが、労農政府となつてから、土耳其同様
漸やく其の状態を脱した、併し今日の国で治外
法権を認める柄である、国王はまだ年が若く国民の
敬仰が無い、二年前まで陸軍大臣をやつた人が今は首
相でこれが兵力を擁して号令してゐる、一種豪傑
風の人である、猶国が彼の首都テヘランや、ペルシヤ
を共和国として此の首相を大統領とすべしと云ふ議
が起つたが、それが其の通りに行かなかつたのも此

国では回教の僧侶が勢力があり且つ保守的である所
からそんなに反對したので目的を達しなかつた、勿論今
直ぐに共和国にするは急遽の変革であつて無理なこと
は無理であるが、併し早晩実現さるべきであらう、彼等
では到る處日本人を歓迎することは土耳其でも同様
である、是れは露西亜を征服したのが原因であつて、彼等では
全く驚異を以つて日本の戦捷を見、よく話されるの
である、文部の某高官のごとき親日派
で其家を訪ねて見ると書斎にはあらゆる日露戦役
の図版を以つて室内を装飾し先帝の御肖像を
恭しく貼りつけ崇敬を寄せてゐる様子が見へ
られる、此後因縁日本人に親切なる侠風を見

へいと云ふが、其の美人の言ふ日本の強度を挫いたのと国
民の常識を乱らしめたのもあるまい、我邦に於し日本
国民の常識の有る分一もあらば国は統く衰ひまい
と云ふたといふ、彼斯は大体不毛の地で其の首都は
むずかしき険なる山があり交通が不便で難儀であるから
この降るとなく交通が絶くる、山も野も樹木がない
交通機関をなくば乗合電車があるまるできぬ、カ
スピアン海に流れた道丈は樹木もあり穀物も出
来るが、此国の大なる天産は石油があるけんと云ふ三十
或州の大地域に亘る土地は僅かに一物をのこしも
英米の借金するのとなり政府は僅かのその借金料
を払つてゐるのまるできぬといふ、交通不完全の結果

の為日本の商業の相手としては大なる価値が無いと
語つた、
土耳其の話を咲てあまりと思つたのを、ケメル、パシヤの
現在政府を云ておるのの如何にも不自由の一小
村落するできないといふことである、起臥を云ふ
ても急作りのバラック同様のものが一つあるきり
き位だといふ、土耳其に公使を送ることになるので
ても、コンスタンチノープルに在住といふことにせねば
誰れも行き手がない位だ、諸外国の間にも現に
外交上の問題となつてゐるといふ、ケメル、パシヤ
も血を流して得た根拠地であるから、どうしても
こゝを離れぬと云ふてゐるのださうだが、実にコ

コンスタンチノープルの旧都まで又ケマル氏、氣合が
漲つてゐるからこそ、之を避ける為めでもあろう
又ケマル、パシヤは旧帝を放逐しそつて其後旧
帝が無くてゐた教主も因的に無くなつたので
皇族の或るものを教主になしたが、ケマルは
これを教主として置けは他日これの皇帝と
なる虞れがあると感つき、機会で向てコラに
の内に教主を置かねばなるまいといふ無いからと
云ふを理由として一旦の教主とした皇族を罷め
て國外に追放するの提議をなし実に実
行されたといふ。如此ことが容易に行はれ且つ
放逐の結果別に紛擾も起らない所を見

ると回教の勢力も漸やく衰運に向つたこと
が推測さるゝ

七月十九日記

ロシア横断記

一

◆日露戦争がすんでから後のことであつた。ウラジオストツクの港外で、ロシアの商船が幾隻となく浮設水雷にかゝつて沈没した。明治三十九年の八月頃にも、一商船が同じ運命にひつかゝつて、二百人餘りの水仏を出した。これと前後して、ロシア政府の御用船であつたイギリスの汽船も沈んで、乗員中助かつたものが二十人たらずであつた。

◆この觸々たる事故の續出を見たある日本人が、当時ウラジオストツクの港務官であつた某氏に『ナゼ早く掃海をせんのか、危險でしようがないぢやないか』といふと、その港務官は『アボシ・ネボシ・カクニプーシ』と答へて笑つてゐた。これは『ドウニカ、コウニカ、ドウカコウカ』といふロシアのことわざである。ロシア人はこれを神様あつかひにしてゐる。つまり、ドウニカさまが助けなければ、コウニカさまが助ける。コウニカさまが見はなせば、ドウカコウカさまが拾ひ上げてくれる。ドウカコウカさまが見むきもしてくれなければ、それまでの話しである、それが運命なんだといふ意味である。

露人通有のヅボラ

アボシ、ネボシ、カクニプーシ

池田林儀

◆ロシア人には、かうした突び拍子もない無頓着な性質がある。ロシアの氣候風土がヅボラであるように、ロシア人の性質にもヅボラがよくあらはれてゐる。むじゆんはロシア人の本色である。快活であつて、陰うつであり、温柔であるが陰險でもあり、輕卒であると同時に沈着でもある。すべてに両極端の性質を發揮して中ようを得ず、人をまごつかせることが多い。そこに面白味がある。人生を茶々にして『アボシ・ネボシ・カクニプーシ』で押し通して行く。水草のように流れたゞようその性質は、とても／＼アテにはならぬが、人としての善良性はその花の如くに美しく尊いものがある。詩の主人公として、近代文学の第一位を占めてゐるものはロシア人であるが、正にゆゑあるかなといはねばならぬ。

◆ロシア人ほど会つて氣持ちのいゝ人間はない。その「あなたまかせ」式な、どうでもなるようにしかならないんだといつた風な、かざりのない明けつ放しな性質が、人の心をひきつけずにはおかぬ。ロシア人にだまされても、にくめない場合が多い。だから、ロシアの旅は愉快である。

◆ロシア人の生活は放浪の生活である。放浪の生活は詩の生活である。詩の生活は花やかな美しい生活であるが、社会ばなれのしたヅボラな生活である。ヅボラはロシア人の天性である。ロシアを知るには、このヅボラから研究してかゝらねばならぬ。ヅボラの研究は肩がこらぬ。何といつても夏むきの研究である。

○文明協会ハ時局研究と標榜して外国帰りの人や
種々の専門的知識を有する人を招き二時乃至四時間
こゝで専門の談話を聴き、それを時局研究と称す
ることゝなし此の会ハ大隈老侯晩年からのことで、自
分が其の住宅の衛ニ当り、其席ハ自分が初めから世
話して今日までやつてゐるのであるが、いつそう一遍
一歩を進めて或る問題ニ多くの識者を会し、討
論会を催して見たいと考案し、実の討論の形式
ニ擬らねバ研究とならないのでこんな迄のものハ
研究だが、実ハ半端のものである、此頃日米問題が
沸騰してゐる矢先、討論を催すにハ此時だと考
へた、志かし盛暑の時ハ即ち人が来るか、どうか

それが気遣ハれた、又其の会が秩序の乱れ旋談会ニ
往つてハ困ると思ハれた、恐こ思ひ付いて、日米関
し相当の知識を有する諸家ニ案内を出して
見ると案外ニも大抵承諾して出席し、会ハ四時
始から始まり夜の十時過迄及び其間食事を
取つたが其会者ハ順次相当の時間説を述べ
たものが十数名ニ及んだ、而論座長をも置き、や、
会議体の形式を執つたが、急の催しとしてハ案
外ニ成功した、当日来会者ハ

大隈侯　渋沢子　日置益　志賀重昂
阪谷男　佐田善作　乾精末　佐分利貞男
添田寿一　姉崎正治　山田三良　植原悦二郎

深田知氏　鎌田栄吉　中村進午　吉田清風
宇都宮林　山科礼蔵　押川方義　市島謙吉
杉山重義
此会を了ぜしと聴衆を廻けしに、速記者は直ちに之が説は
公刊せざることとして無遠慮に言はしめたり、公前は
瀧淑子を吐きし後は大隈侯其意を了りしに、当
夜説を陳べしものは左の数氏なりき
瀧淑子　志賀　乾　佐分利　深田
姉崎　山田　杉原　深田
此の試みは文明協会に於て時々之を換へ会を開
くとすれば成功するものと感じたり、
長時間に渉る論議は結局具体的に決議換はしものなし

生ずるものなり、甘く少なくも決議を欲したる輝かしき
かりし、諸家の説を合致して見るに
一　米国は世界戦争の後餘りに多くの人が入り
込みたること、亦世界戦争の実験に照らし
、米国にある異民族がナショナリテーを
鋏くことを痛感したること、今後外国人を
誘致することとなれば、米国は人口過多を生
ずる不利を感し、未来の紛擾にしてこ
国策を立てたるや、現国方針に出でたるは米国
の国状已むを得ずと為すの論（深田高田氏
の説く所）
一　米国はエリザベス朝の昔し英民が移住して

其の文化を夙に植付努力して今日に至りしは
之あるが為なり、彼等は優秀民族を以て自負する
ものなるが為なり、其の移民益々多くして其の繁殖
力の大なる■彼等をして寒心せしめたるなり、
彼等は窮極優秀民族は移民の為めに
自国民族の優越を失ふに至らんことを
を顧慮し始めたり　（志賀之を説く）

一 外国の移民を嫌ふは決して米国のみにあら
ず、英国の如き其の領土に於て甚しく外
人の隠密■旅行を許さゞるものあり、
らざれども日本移民を歓迎すと云ふ説あれ
ども実地は全く反す、すべて世界の大勢

日本移民を喜ばざることひとり米国に限ら
ずと、主張するものあり　（志賀）

一 日本は結局満韓に剰余の国民を移すの
国策を取らざる可らず、此の区域に植民せ
しむれば移民は日本国籍を保つを得べし
他の方面に於てすれば、結局二代三代の後は
其国土の人となりてしまふ、日本国籍を移民をして
民族をしてまでも置かんとせば満韓朝鮮
を其地と定むる外なし　（日置）

一 米国の加州に日本人排斥の烽火の揚る所以
を其土地の富饒其の気候の温和等に帰し、
天与多くの恵まれたる土地をいかがで他国人

の蹂躙に委するハ加州の將来に措あくしと
なす、これ排斥の起る真因なりと説くことあ
り（乾之丸を説く）

一 加州が日本移民に壓迫を加へ初めたるは今
より十年前にあり、彼等ハ漸次日本移民
のあらゆる權利を追ニ之奪ひ去り、文後
に今度の如く全然拒絶を議會にて決定
しなれども、實際の事は議會の決定前より實
上の拒絶を受けゐたるなり、日本に於て抗
議すべくんバ既に十年前より十年間其の壓迫の
都ち抗議すべかりし（此十年）我外務ハ
常に柔軟外交を事とし、當の内田外相

ハ米國の先くなん日本より滿韓の移民すべ
き所あり必しも米國に於てせずともよく
云へしことあり、退讓出斯くして今日を
馴致するは寧ろ執力の致らしむる所、今
に於て米國を責むるよりも先づ我外務當
局を責めさる可らず　（植原）

一 米國が議會決議前既に事實上其移民を拒絶
しありしなれば議會決議の形式を取りたるは寧ろ
穏かなりとするの論は米國に於てもあり、如
斯ハ國際の信誼に悖きたるかれ日本の國を侮辱
するものとして日本ハ默過す可らず、然らバ即
ち日本ハ如何を不満として世界に訴ふべきや、

日本の輿論ハ何を不満とするものなるや、此點甚だ
不明瞭なり且つ日本の國論區々なり、米國ハ思
へらく日本人既往の米國の措置ニ不満あるにあら
ず、唯ハ最後通牒ニ依つて表明したる形式ニ不
満あらんと、米國の見る所如斯し、而して日本の
國論も果して米國の察する如くなる歟、事實
決して然るにあらざるなり、今國論ニ一致なき
なり、爰ニ先づ國論を一定して米國ニ臨むの
要あり、

一 米國の最後の措置ハ既往十年ニ於て米國が日
本移民ニ加へたる暴虐の最後の形式ニ過
ぎず、事ハ國際信義ニ関し重大なりと思ふも

吾人の争ふべきハこれなりとす、何故ニ米國を
他の國民と平等の取扱をなさゞるやなり、従
來ニ痛感を與ふるハ此點ニ在りと存ず、我國
論も此點ニ一致せざる可らず（山田）

一 米國の輿論を動かすの一手段として亞細亞
同盟を形造るべし但し兵力を以つて對抗す
るものにあらず、同色の力を糾合するハ、主張
を強くせんとする所以なりと説くものあり（深田）

一 之れニ就して反對するものハ、亞細亞民族
同盟なるものハ言ふべくして行ふ可からざることなり
古より如何なる大規模の同盟目的なりても成
りしことなし、皆て民族其の種を同ふし

亜細亜ニ属する者ハ、其国々の各種皆同し
かくされバ、多く欧洲の統治ニ属し、其の実義
のことき各々同しかくされハ、之れと同盟するが
如きハ空想と云ハさる可らず、統而同盟す
べきの国ハ支那と他一二の国あるべきさるべし、
夫れらも二流も三流もでも下になり、其国を率て果
して何人の力を増すべきや、假令ハ一歩を譲り
其れか大なる力を為すとせんか、これか為めに白
人を激して彼れと白人同盟の起らん事未だ知
る可らず、如斯ハ最も悪策と云ふべし　（姉崎）

一　日本ハ近年強国となりしより一概に高ぶり亜
に傲慢の態度を以て亜細亜諸国に臨む

而して今ハ之れと提携せんとするハ餘りに虫が
よ過ぎはせずや、日本ハ反省して寧ろ亜細亜諸
国ニ親善の禮を執るべし　（植原）

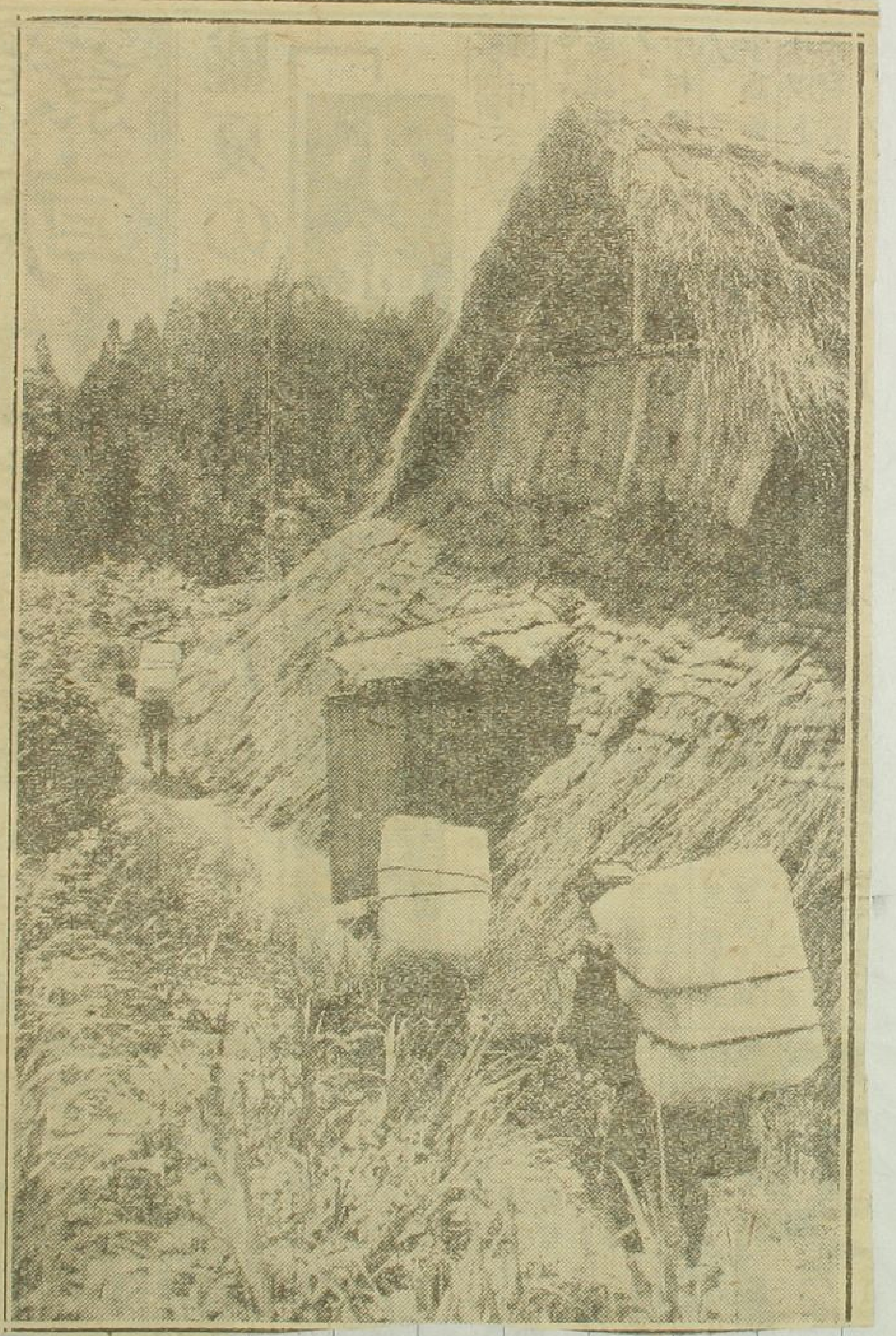
一　日本ハ人種の如何ニ拘らず、今ハ世界列国の畏
敬を受けつゝあり、既ニ強国の伍伴ニ入てより
より白色の小国も皆な国際上日本ニ譲
りつゝあるハ事実なり、僅ニ米国今回の
事ある耳なり、夫れらも亜細亜なる黄色
人なるか名乗りを揚るハ彼れの言説を
造りしことを言證せしむるのミならず
日本の不利ハ甚だ大なり　（佐々利）

一　結局亜米利加ニ對し如何する乎と云ふことハ

時間の問題と帰す、彼等の反省を促すと共に
我国も亦自省を要すると云ふ平凡な論結●
ではあるが、今の處これ以上の工夫はない
概略右夜議論を戦はした點は以上の如くであつた
（七月廿一日記）

○晝寝した後での無駄話は　アラビヤのシリヤの砂漠
はこれ迄駱駝の背上でノソリノソリと行けば四五日
間を要した所、今は自動車で走る、晝夜間断なく
疾走すれば二十四時間で經過が出来る、三四個所途
中休憩するとしても三十時間で優に經過し得ると
いふ、沙漠と云へばブクブクして車の輪の没する程積るの
と想像されてゐるが、實際を聞けば可なり堅いさうで

自動車の疾走するは一向差支なく、前面に遮ぎるものが無
いので一直線に行けるので痛快味があるといふ、
石油が無ければ夜が明けぬ所か、石油が無ければ戦争
に勝算が立たぬことゝなるので、アンデスの山上まで石油
の有無を採検するなどマッチを持つて多くの人が立
騒いでゐるといふも此故である、志賀重昂氏は油断
大敵」とこやしたが、實は油が断れては大変である
米国との関係が行詰つて来た、さて日本今後の態度を
如何すべきや、亜細亜とせまいか、亜細亜まで締られ
まで下る國なら、白人を敵と廻はさんか、彼等の云ふと
先頭を教へる智的中間なら、西さんは東さんが変



涼味　新潟地方の雪室から雪賣の出動

日本は関ヶ原當時の事情を一層大々的に現出し、國民
に去就を促しつゝあり
Asia one とは故人岡倉覚三が其著に用ひし
警語である　白人に對し之の警語用ひ得べくんば
彼等に對して一種の脅威なり、唯だ之が何ぞん、今
は事実にあらず、之の警語の事実を既往に在
り今は Asia was one とあふのおそし　亜細亜同
盟利彦見込なし
松波博士國の使命を帯び十数年前外国の會議に
臨み為る際に、列國の輕侮を受けたること一に彼等
の耳に入らざりしに、今行て口を開けば其言ふ所多く
強國の容るゝ所となり、而して小国白耳義瑞典の如

ときハ何事も日本に譲り後へ立つことを甘んぜず、こん
回ら強露を征し驚威の状ならしむる所とハ云へ、
餘りの激変なり、深夜ひとり自問自答す、日本
ハしかり強国なりやと、而して自から鐵つく能ハさる也
と

近来邦人の印度土耳其波斯等を訪ふもの多く
此等亜細亜古国の地名漸やく人の唇頭に上る、而して吾等の
くらのよく記臆する能ハず、志賀重昂須田某等の
地を旅諸して辛苦に語るもの多く、吾輩ハ地理学者を
以つてみづから任するものなれバ此等諸国の地名を
知らざるのまあらず、此旅行以来さまもとから知りてゐ
たらしくいろいろの地名を口外するが、実ハ今度

始めて知りたるホヤホヤのものなりと、一笑す
外国の学会などより推されて会員などになりてゐる本邦
の学者ハ学者間にありてこそ名誉とも感ずれ、局外者
にハ風馬牛の観あり、而して斯る名誉を有し居る人も、其の肩
書を振り回ハすが如き機会ハ餘りあらざるなり、但し
意外の場合之れを振り回ハして活路を得たるの例ハ
志賀にあり、志賀の自白に云く南阿弗利加ハ英国の厳命
により外人の旅行を許さず、志賀ハ正式を得ず、自から
皇立地理学協会の会員たることを思ひ到り、此名誉
の肩書を振り回ハして英国官憲の注意する所となり、旅行の許可のみか其の保護をも得て、スマッツ将
軍と会見することを得たりと語る

露国人のヅボラさハ、アボシ、チボシ、カクニブーシ
の三語をもつて表せらる、どうれかなるであらうしと
云ふ意味ハ、このごくしたる言の葉の内にいれつてをる
るらしく露語を解せぬものすら首肯せる、其の露
西亜人ハ往々露領の森林に山火事のあるを日本人に
帰して云く、露西亜ハもと山火事なきものなし、日本
人濫りに烟を喫して火を捨てまする故と述ぶるもあり、
これ正しく日本人のヅボラを責むるものなり也　ヅボラの
本家より此の詰責を受く、日本も露西亜と劣らぬヅボ
ラ性を有するか　七月二十二日録
○坊間を漁り若干の図書を得、左に記するの
ハ稀覯の書こ

一國史經籍志　十冊
此書先荘焦竑の著書焦竑の編する所
明代の図書を四部に分ち其目録を
備へたるもの史に缺くべからざるものとす
日本にて復刻しなるハ寛文頃にあ
りしか、刊年を記さいのみなれば、略ぼ其のこと
く推定するを得べし、嘗て安田松廼
屋文庫の旧本を見て、欲しく思ひゐたり
しか容易に手に入らず、今初めて嬉しく得
たり而して松廼屋本既に三冊

一栗山堂文集　六巻合三冊
栗山文集版刻あれども此本ハ全く版本

と編者を異にせり　校本と對照するに
此書に收めし版本に闕くもの四十篇の
多きに及ぶ　且つ文字の相違あ
り又文を存せし年月を留むるもの此
の集に多し　蓋し此集古賀侗庵の
編する所にて版行を欲せしに成らさ
りしもの如し　巻末に侗庵の跋あり
盛んに栗山の文を揚げ侗庵栗山に沔
事しものなし故に称揚此の如き故あり　此集
栗山の逸文を補ふべきもの大なる資料と
なすを得べし　川越松平家の舊藏
なり

版本に逸したる文左の如し

復冨伯知　答頼千秋　與頼千秋
答頼千秋　仝　仝
酬頼千秋　與村上仲恩　仝
記那須與市事　化源豆州開庫事
記神巫事　栗山堂射字式
研譜序　菊菊庵記
静寛院翁自叙記　筆譜序
送河孔陽西歸序　痘瘡選方序
福井君大草墓誌　金澤府儒員林
師馮碑銘　中村氏三墳碑
同上碑陰記　五十川穆翁碑

金澤氏先塋記　芝氏先塋記
吉田一西翁碑　茶翁紹易居士墓志
故備中徴士西山拙斎翁碑
祭吉田在中文　硯匣銘
東游舞図賛并序　蚊蝱針匣銘
醫人某氏賛　題張中景像
淸水府僚哀歌　葛原詩話跋
蓮尾跋　以上
写本　十二冊

一　譯本逸史

余山陽の逸事を録するに及び頭中偶々傳ふ木向陽の稿本日本外史俚諺抄を得て喜こびも架中に置きしがかゝるに之れ

を称とす、而して逸史なる俚諺抄ありと聞きしかれども其書を知らず亦其の譯者を知らざりし今偶々琳琅閣に得たる写本十二冊は乃ち日本外史の俚言抄と同一の譯者なり、余喜んで之れを購ひ外史俚言抄と併せて架中の珍とす、蓋し此両書は写本として極めて稀れに存するもの、外史は写本にとゝ之れハ完本に、向陽先生は木氏にして蒙求の箋注を作りたる人なり

一　松の葉　五冊

此は元禄十六年刊する所にて俗謡を

輯録し甚だ多く名高きものなり、殊に記す
るを要せず、此等此書、價甚だ高し、全
の揃ひたるは田版式猶ほ下る故に五十五円に購
ひ得たれども、往々百円の價あるものあり

一 楽章類語鈔　五冊

此書は山田與清の古楽府を考証したる
ものにて全部十二冊あるべきものなれども
出版されたるは僅かに五冊にて止まりたり、
寥本なり、稀にて出るものなり

一 [illegible]芳艸根志　一冊

伊勢の殿村常久が芳二十種を考証
したるものにて写生図十枚を巻尾に附

す、岩崎灌園の畫する所なり、和装本四
書の巻数まで著しきものなれども一部
本草の書と見て差しかへなきものなり

稀本也

七月廿三日記

○内田魯庵ハ余が豆本蒐集に熱心なることを知
って此頃余に折紙して余の為めに一事を語りたり、今の英国の
皇后ハ多くの玩具を蒐集され、之れを並べ置きドル
ス、ハウスを作られ、其の小家屋の中まで図書館も
備ってゐて、其図書館に備つけの本まで特製の小豆大
のもありしが、流石に精巧に作られてある、貴下の豆本

と執れと云ふのが、自分ハ同じ趣味家が彼方の皇室にある
ことを喜こんだ。序に玩具に付ても一事を報ずる、
きふ性内道具を紹介して示されし玩具がおもしろ
く感ぜられた。それハ二個共一種の人形を収められてゐ
あるが、一個ハ日本の松笠のごとき実であり腕が生ら
れ頭上にも帽子のごとく、それが栗のようである。面部に
粗末ながら心見え、頭髪と頬鬚ハトウモロコシの毛
の赤味を帯びたる様なるので心見、靴皮靴の全体を
昔の様なるので拵へてみる。一個ハ紫束を負ふた
居り他の一個ハ手に赤色の六角の器を提げてみる。
共に高さ六七寸位の人形であるが、一見して露国
産であることが知れる。双方共同一の気児を形

とめたもの也といふ。片山伸の露土産也と云へたが、一
種露国的特徴が認められた。日本ハ玩具を作るに巧
みなりと云はれて居るが、外国のハ粗中におのづから一
種の風味がある。此頃丸善の店に立寄った序に近着
の玩具を漁って見ると、ゴム製の鴨や鯨な
とがあった。僕の最も割合によく出来てゐた。此
等のものハ水中に入れて玩ぶものであるから、時節
柄適当の商品であると思ひ一二を購ふて人に贈
つてやった。（備考ハ廿七日）
七月廿四日記
○関西線鉄道部の関人と旅行の其所に会ふ、
毘沙門の横町に入る狭斜の巷あり、北通尾崎
待合あり藝者家あり、料理屋あり、道狭く僅

かれ俥車を通し得べし、両側の家甚だ接近し、互ひに聲語を通するほどなり、予等は其幾戸の二階に坐して話す、前楼は乃ち妓の家なり、簾を垂れて人目を遮ぎれども、室内妓兒等の行動透視するを難からず、年若き妓、鏡に對してしきりに紅粉の粧ひをなすは繪の如し、遮ぎられて見ざれども半身の裸体は、其の白き肌膚、其の豊かなる双乳、其の軟かなる四肢、皆な眼曲線、皆な眼鼻に入り来る、判ずるに此女は芳紀未だ二十に到らざるべし、荒々としたる趣はあらず高部に凝り、偸視一種の趣あり、支那小説などに往々前楼の女を偸視して情を通ずるの陳

春脚色あり、北境之れを聯想せしむ、必竟露骨生活の一興なり、唯だ吾れ先で情懐枯死、此光景に觸れて禅僧のごとく心を動し得ざるは寧ろ憐むべし、一笑、

○逗子の家池田と一屋を借り受け一週間前より避暑の為め出かけて居る、兒等を迎へんと昨日思ひ立つて行く、正午近く逗子の停車場に着すれば兒等の出迎へてプラットフォームに歓聲を発して迎ふ、直ちに俥を列ねて逗子の遠藤といふ三室の新家屋にて、四隣皆な空地あり、風通しよし、東京よりも土産をたずさへ来ると アイスクリーム、菓子、サンドウヰッチなど齎らす 彼等

の腹中に入りたるか、余ハ笑つて曰く卿等ハ餓鬼なり
と一般なり、父命ハ施餓鬼の為め来りしに謂る観
あらむと、女児ハ曰く今朝すオトーサンを停車場
に迎ふハ四回に及ぶ、実ハ鈴木家の来るを待つこ
と久し、世帯道具未だ備ハらさるなり、此家にハ日々
の勝算あり、之れを超過する能ハず、願くハ不備
のものを購ひ供へよと、余ハ笑つて諾し、何事ても
購ひ得て来たハさん、と麦酒一瓶を倒し置き後
女児と婢を伴ふて其の欲するものを随意に
購ふ、其数二十種の多きに及び甚だ漸く
振ふ、児女爺を救世主なりと云ふて謝す、此
言甚だ佗味あり、彼等ハ今世帯の研究中なり、余

素を会得せしめたるハ水泳場なりし釣る時ハ指を去る所
なり、一時避暑の僑居此點に於て意義あり、彼等
ハ潤澤の給供を得て此日始めて美食にありつきた
るなり、而して後ちて二時間横臥し、起きて海濱
の水泳所に到り見る、途中東方橋をこえ、此年
の震災て海嘯起り、海岸ここに直接し寄せたる
と一帯の海あるが故にここに除ひ常に潰えたるとか
今漸やく別荘なとの修理を始め居るものを見る、海岸
近くにハ石を積み去り地形の波に破壊されたるを供
くなりおる母子も見受けたり、もはや四尺を忘れて、水
泳場の客の数ハ夥しく多くなり、但し今年
逗子も不景気にて多くの客ハ日帰りする模様なり

貸渕甚だしいまでとなふ　（七月廿七日記）

○課余にハ市中に出でゝ書物を渉ることを例の如し、購ひ得たる書に就きて昔執筆を忘れんとする程、此日獲たる四五の雑書の内読みたるもの二書あり、蹴鞠湖月記（二冊）と木下幸文の亮々草紙（三冊）となり、前者ハ蹴鞠を和歌を詠ずることに擬して事ハ異なれども心得ハ同じと説く、幸文思ひハ甚だしけ離れたる比較の如くなれども、説く所妙にして節をとなる頷づかるゝこと多し、蹴鞠ハ今の西洋殊に蹴の野球に似たるいふべくとも幾多別条の相違あり、且つ今の野球の如く裸体にて棒を振り回はすにあらねば力に任かせて打つなどいふ事ハ無く、衣冠して穿てる靴にて蹴るものなれバ、外相甚だ閑しかるべし、野球に於ても、姿勢の醜美や打ち方の正否を論ずる事なれども、蹴鞠ハ装束を着けての場合が多く、威儀や品位を以て其の藝の優劣を定むる標準となすものなれバ、或る意味に於て野球よりもむつかしき趣あり、云ひて或る説きがたき呼吸で蹴揚げ、多く力を費さずして高く揚げるを上乗となす、其の高く其の沈着なる態度との鞠の落つきの優美とハ蹴あげの力ありて且つ荒々しからざる、皆心性の發露なれ、宛から綾羅錦繍を織り出すと一般、むづかしき絵

を繰り出す心得なくば、中に太き絲の交りて醜くき反物となりなん、和歌を論ずる者も先張り此心を要すること勿論なれど、説く所と比香の特色あり、すべて藝は或る程度まで達すれば品や艶などを要求し、鞠のごとき唯に高く揚ぐるのみを以て備れりと為すべからず、藝の如きといふは直揚の目的を達しての外にあることなれ、心に充分の餘裕なければ、其の階級に上り難し、野球にしても名手の如きは矢張り同じことならん、蹴鞠の心得は移して野球の心得となすも差支なきを覚ゆるなり、古かしは和歌をよむ人(即ち蹴鞠の上藝ある人)なりし

和歌をよむ心得を以て此伎を練する謂なれ
無きにあらず

さやく答紙と木下幸文の和文隨筆なる、此の三冊の内に著者の苦心力を入れたるは和歌の本體を説き明かしたる點にあり、論案は景樹派の歌人なれ歌と心のあるのみなるべど、よむべし天地を動かす名歌は其心のこもりたる歌にあるを見なすしも思構を凝らしたる伎巧の歌にあらずと為す、彼れは此の見地より本居を評し、本居は國学に於て大家なるは定評あれども和歌には拙なるのみならず和歌を解することもなきにあらずとなし特に一冊の紙を費して本居が源氏物語を評

論じたる玉のを櫛の和歌評論の部の垢を摘ね
し、本居が源氏の文を稱揚する餘り、和歌の稱揚甚ば
こ及びおよそ歌を詠んとするものは源氏の和歌を軌範
とせよ、其の氣高き雅びなる所を學ぶべしと説きし
なるを難じ、幸文は曰和説の本歌は偽善にあらずや
本居の説く如く人がこれ偽善を教ゆることあるにあ
らずや、花や月を賞する心は昔しと今と同じからん
らざるものあり、今の人は古の心を汲みても花月を賞
することは真心なり、強て上代の人の心となりて賞
することはき偽りなることなし、縱横本居を駁
するものに幸文の面目躍如たることあり、幸文は
所謂る新流なりし本居は惡雜宗と屬す、其

相容れざるも宜なり、然れば實なる文と左袒せん
とす、幸文亦伴蒿蹊が榮華物語を評し
これ好個の物語なれど補處の形容飾りと數く
失す亦佛教を説く所も宜なり流るゝと云ひ
しを駁し、當時の著者が眼に眩ばゆき程なるも
其他の補處を細説するへ人情なり佛法隆盛
時に其記する所の詳なるも亦自然なり、末代の小説
まんとを型とも論ずるは當なりと辨護するの
なりとも云ふ意を得たり
七月廿八日記
○三宅雪嶺は自分と同意の関係もあるならむ其の執
筆の雜誌日本及日本人は長い間寄贈を受け
て讀んでおる、痴きも内輪に風波があつた揚句、

雪嶺の独立して別に我観と署した雑誌を刊行することになつたが、それを寄せて来た改巻第二號を手に把つて見ると如何にも見すぼらしい、小雑誌であつて、雪嶺の個人雑誌と標榜してある。全部雪嶺の執筆のものばかりを収めてある。進出か退出か、雪嶺の崇拝者は却つて之れを喜こぶかも知れぬが、何となく雪嶺の末路を表徴するやうに思はれて気の毒な感じがする。此雑誌の巻頭には感云吹の草と云つた白樺の挿絵があり、母の花園か云吹を追懐するの文も掲げてある、個人雑誌の面目か明かであるが、流石に雪嶺も一冊全部を自分の筆一つの文で

充するまでゝ、種切れと云ふ気味があつても、自己の面観随筆の類するものも収めてある、この中の一つで雪嶺は自ら例の無いことだ、何となく衰れな心地がする、彼れは其の随筆で自白する所に依ると、彼れは絵画が好きだと云ふてゐる、大学時代に絵の勉強もしようと思つたが、絵もさうもいつも百點を採つたとある、又[illegible]化学がすきでこれも成績がよかつたとある、同窓時代に彼れは畫を好みもあつたことは隠れもないが、化学趣味があつたことは初耳である、彼れは軍人たらんと志したことがあつたと自白し、若し其の道を歩むならば定めし旅団長位まではなつてゐたであらうと云ふて居る、これも初めて

少く所であるが、彼れは其の當時代に於て確かに英雄
崇拝者であつたらしい、那破翁の像や西郷隆盛の
肖像を掲しかつたのも恐らく軍人たらん志のあ
つたひらめきと見るべきであらう、彼れはある時
殊に洋のをしれ、そして刷るを見学につとめたのは
絵画であるといふてゐる、元来其が相當の画を書
いたの士其の遺傳に據るを解してよからう、彼れは
役人嫌ひであるが、かつて文部省の編纂係をや
つた經歴もある、衆議院の速記長に擬せられ
たことがあるとの自白は初耳であるが、如何の役目
を彼に擬したその人を寧ろ不思議に思ふ位で
ある、彼れも開成學校が東京大學となつた頃に理科の

試験規則が改まつた結果一旦辛ふじて及第しれの新
規則で資格を失つたこともあつた、其の時に士官学校へ
入らうとしたのだ、彼れの兄は（植德）早大に教鞭を執りよく
知つて居る法科出身で我々より一年先輩である、雪
嶺の云ふ所では、政治家たらんとして失策つたといふ
其の子の恒方が昆虫学者となつたのも一奇である、雪嶺
の大著は十二年かけても真善美の合数ともいふべき東
西美術の関係（二十四回）学術上の東洋西洋（八十回）
東洋教政及西洋教政（今日二十回に達して居る）の三
篇であらう、何れの何れ見ても十数年骨を折つ
たものである。

七月廿八日記

杜詩研究ニ必須の書なれとも極めて稀本にし他ニ得れ
ニ一書ハ明和伎鑑なる、之れ武鑑ニ擬れ俳優の
譜を列したるにて、紋章、庭、屋號、兼務等
すへて武鑑の体ニ擬す、其の書名の明和伎鑑と
云ふも亦武鑑の表題ニ擬せしなるへし七年し
刊の如きもの当時自然工夫さるへきし書たるなり
武家の隆盛時代ニ於て俳優風の譜を記く
のを以て僭上の沙汰と為し、終ニ絶版を
命しなれとも偶のなきさまあらす、此書歌る所ニ命し
なるの故と好事家ニ珍とせられ價甚た貴し
〇西村常山八常陸根本寺の僧なり後薙髪して寺
内ニ家を営むて居る、南畫をよくす、清人顧若波

科學

サッカリン よりも甘いもの(下)

古川氏発見の砂糖の実質研究は暫らく別問題として、これまで、世界中の「甘み」競争の最高レコード保持者は、砂糖業者からにらみ殺され兼なかつたほどのサッカリンであることはいふまでもない。この品物は後で母校の校長に出世した、アイラ・レムゼン氏がまだジヨンス・ホプキンス大学の学生時代に発見したもので、その材料は「甘味」とは甚だ縁遠い品である。眞黒で醜い事この上なしの、コールタアから、しぼり出されるもので、普通にいふ砂糖とは何等の縁故がない。普通砂糖といつて人がすぐ聯想する甘しよ製の砂糖よりも、コールタア製の砂糖(といつては、未だ当業者には、不平もあるだらうが)の方が、數百倍あまい事實は、どうしても否定する事が出来ない。若し水に解かしての比較からいへば、サッカリン水(いゝ加減の調合)の一滴が、普通砂糖水の二百滴に匹敵するのが、事実である。砂糖水ならばその上水を加へられて、甘味の薄くなる事は、赤ん坊でも心得たものであるが、サッカリン水の方では、水が加はるに従つて、甘味が濃くなる。最後に砂糖水が全く甘味を失ふ場合における同水量を比較すれば、砂糖よりもサッカリンが七百倍あまいといふ事がわかる。

しかし、何も砂糖以上のあまいものは、サッカリンに限るといふ訳ではなかつた。今度最高位にのぼつた、馬鹿長い名の新砂糖を別としても、確に二種は挙げられる。一種は、これも例の眞黒なコールタアがその製造人で、ダルシンと呼ひ、兄貴のサッカリンに比しての甘味は、半分に劣るが、この兄弟二人が一しよになれば、甘味が倍加するといふ不思議な力がある。外の一種もコールタアの生むいはゞ兄弟にあたるもので、末弟ともいふべく、甘味は砂糖の百倍しかない。グリュシンといふ名がついて居る。

その外にも、最近発見された砂糖以上の砂糖がある。それは砂糖(くどいが普通の砂糖)よりも約三百倍の甘味があるといふから、前の三人兄弟の末弟よりは大分年長者といつてよろしい。これも素性が甚だ珍妙である。ドイツが世界をこわがらした毒ガスのクロリンを含むので、この名もヘキセル・クロロマロナマイドと呼ばれ、不思議千万な事には、この品の原子がモレキユール(いはゆる分子)を作るまでに、少しの間違ひが起れば甘いどころか極めてにがいものが出来あがるといふ事である(完)

〇七月廿八日又一
二の回出を得正
徳年中京洛ニ
刊行の杜律詩
話二冊清陳午
亭撰小册巻
首ニ伊藤東崖
松岡玄達の序
あり、松岡の序て
徴すれハ此詩話
午亭文編ニ收
むる所と云ふ、

こゝに於て書画境大いに進む、余画帖画冊を拾すれば
思へらく、当世之れに匹するもの無しと、彼れの画一種他
人の及ぶべからざる風致を帯び、絶へて俗臭なし、山水
人物皆佳なり、詩書亦見るべし、服部耕石來訪
話次此人のことを語る、常山曩に於て一種世才あ
り、彼れ根本寺住職たるとき、維新後政事気分勃
り、官寺を惡むものありて往々官寺を公□つ、嘗つて常
山を召し、政爾也獄極楽、何れの寺あらんやと実在するやと問ふ、常山
言下に高天原の佛地獄極楽と
音声の諸者の宗の官寺をもする能はず笑つて退
きといふ、彼れ画をよくすれども郷国の人の為めに決して筆
を把らず、郷人に至るまで多貲を散して請ふもあれ彼
笑つて曰く、価を掃つて見れバマサカに軽入する譯に

ゆかぬよと、言外に彼れの抱負あり、彼れある時銀
行者の嘱に応じ扇面に書を揮す、書輙ち細きを
厭ひ、人をして書き改めんことを需む、彼れ言下に
快諾し、其の扇面を持ち来らしめて、而して日を経れ
ども書き改むるを為さず、銀行者も催促するに及
び、彼微笑して曰く、人に書を嘱して可否を言ふハ
無禮なり、余ハ書を面向かすと思へ、他人に書かすが
よしと、銀行者人をして為めに且つ何ぞ最初書き
改むることを諾しゝやと詰らしむ、彼曰く如斯くせされバ
扇面を取戻しかねきが故なりと、彼れ東京のお玉
ヶ池に住せしことあり、地主と論諍せし又之
退かさるを得さるに至り、彼れ其擁人なるを利して

一篇の報條を作り、我の居を棄てゝこれを雲水と為し
錫之、財寶皆な足要なりし、貰ひて齋路船に充て人と、
報條を見るもの彼れを気紛の者と思ひ、且つ雲水の
巡錫を高しとして、知人多く来り彼れの手澤の書
畫幷出鑑を價を倍して購ふ、鷲めは失いて利を得
ざる、彼れ百両程何れすか、吉ゝ用錢すゝん根本寺
内に宅を営む、蓋し家財を売りたる資を以て建
築の資に充てたる也、彼れハ今書画名高く墨蹟を
寄せて書画を請ふものあり、随つて潤筆の為替金
郵便局に来ることは相つぐ、彼れハ其の通知を受
くるも放擲して受取らず、規程の日数をすぐし
過ぎ、擾らし来れと云ふんだ、そりの態、而もそれ飄々

請ひたるを例とす、郵便局毎に此人の為めに閉口
し郵便局長會議の話柄となる、安んぞ知らん之れ
乃ち彼れが巧みなる一種の広告なることを、彼れハ名
うく隅に置けぬ奴と口揃へて語る（七月廿八日記）
○帆足杏雨の寸珠画帖を売りに来るものあり、購ひてハ
持座中のものに示す、此帖合錦十二枚を收む、一郵鈔
湯と見るも可なり、山水の帖殊に架中に多し、殊に此の
画を渇望する者に示す、杏雨竹田の傳統を受け家紛を画
するの妙、筆山に比して霸氣なく、温潤
の風味ふべし、款に云ふ丁丑之春杏雨顯逸　七月
三十日記
○法隆寺から出した西閣四五通を商としして来るものあり

中ニ新井白石の長文の自書簡も有り、彼の七枚の真蹟
である。各通に長方角の法隆寺の小さな印が捺し
てある。各通の一端に穴が二ツ、穿ってあるのは何故
だらうと考へて見ると、法隆寺では保存を要する書簡類
の蠹蝕を防ぐ為め、皆此通り穴を明けて紐
縄をとほし、之れを天井に吊るし置くことにな
つてゐると云ふ。然らば蠹蝕を防ぐの一法でも
都合よい代り盗難にかゝる憂がある。此の
数通の書簡なども或は盗み出しにならぬかも知れ
ぬと云ふ。（七月三十一日）
○徳川五代将軍綱吉の権臣柳沢吉保の人物に就て
近年研究者が追々出で来て従前言ひ来りつゝある

いては全國的であるが、就中製紙工業につ…のがある。…額は、東京、…
先ず…年額に上る盛況を…畢竟本縣の地…ある證左でな…縣工業と製紙…

である事を思はなければならぬ。

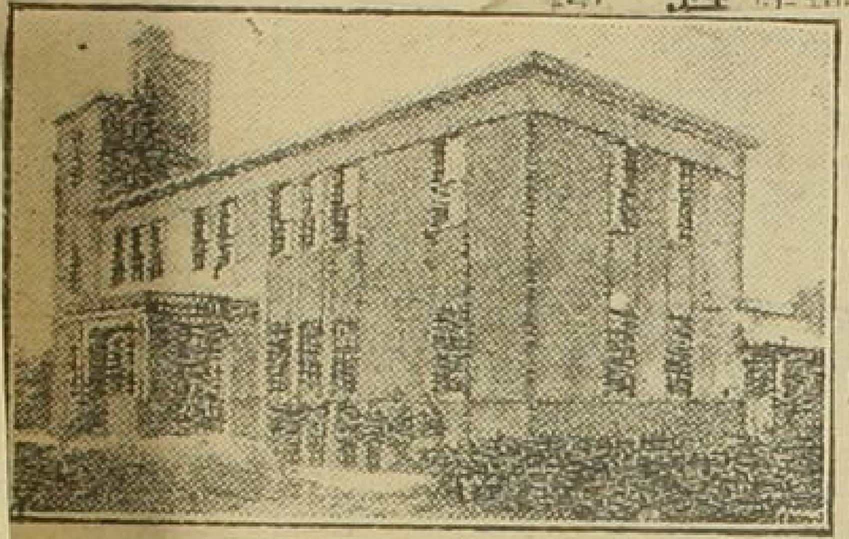
縣下業績一瞥

於是、本縣下における同社の事業を一瞥してみる。抑ゝ同社第一工場を本縣富士郡鷹岡村…山麓に設けて製造を開始したの實に明治廿三年一月のことであるが、爾來、段々として進む洋紙の需要止まるところを知らず、第二第…の工場を増設し、一方北海道大…等の工場の

謂つて差支へない。

擴張せる羽翼

如上の理由によつて、同社は本縣工業界に寄與するところ決して尠少ではないが更に、同社近年の發展ぶりを見ると一驚を喫せざるを得ないのである。即ち、



札幌測候所

に難工事であつたこのトンネルは石油層の頁岩で掘鑿に從つて膨脹するので非常になやまされたあげ句西洋で海底トンネルなどに使用するシールドを使つて工事を進め今年の春漸く開通するに至つたのである

線路 は折渡トンネルの六十分の一を除く外は全部百分の

交通輸送の機能

静岡電氣鐵道株式會社の業績は逐年好勢

静岡縣下の物資の豐富なることは、縣勢の一斑にも既述したところであるが、之れを適宜、相場の變動に應じ、需給の如何に

留意して 配給輸送の任にあたるには、是非共、運輸事業の發達に俟たざるを得ないのである。更に旅客の輸送も、土地柄だけに一年を通じて年々増加する傾向があつて交通機關の達成には何人もその希望を繫がざるを得ないであらう。從つて縣下奥地方面に貫通する鐵道省東海道線は、沿道交通輸送には、どうしても公共的性質を帶びて

奉仕的の 交通事業會社の存在を必要とするのである。この點で、静岡電氣鐵道株式會社の

營業成績の大要を見るならば、概ね次の如きものがある。即ち、當期間に於て、旅客貨物の輸送は、概して順調であつて、半期の營業狀態に比し

極はめて 良好である、例年、上年下半期は震災地方、復興材料輸…

名勝舊跡

谷口 梨花

今度羽越線の開通によつて關西との聯絡が容易に便したから結局交通關係も經濟關係も昔にかへつた次第である云々

私は羽越線の名勝に就てその概略をお話しする。

鵜倉、新保、鳥谷、徳谷の沿線…怒濤打ち寄する日本海岸に跨ち、汽車はその斷崖を縫うて時々波上を走ることあり、羽越線第一の勝概ともいふべき鼠ケ関、笹川流れの景勝もその間にふくまれてゐるのである。

この沿岸はいはゆる北越の親不知子不知の險難所で、昔、義經主從もこの難所を忍びゝに傳うて鼠…

し、松林の緑濃き彩り、寄せてはかへす小波の岸くほとり、旅行の一夜を過ごすに足る旅館も備はつてゐる。

到る處温泉地

がその海水浴場よりもこの線のほこりとするは矢張り温泉でなければならぬ、湯田川、湯野濱、湯温海――いはゆる庄内の三温泉を初めとし、…の松山温泉、坂町

本邦製帽界の誇

世界的權威を有する

帝國製帽株式會社

國產奨勵の際は近時獨り上にも各方面に唱導せられつゝあるが、輓近、漸々進歩發達の跡を示すわが國各種工業の力を以てするなら…

在來維持更に進展の機運を多量に抱藏しつゝあることを考へる時は、同社の貢獻はまた偉とするに足りるのである、帝國製帽のブランド

に十一割二分といふ大増加を見せたのであつて、當業者の期待は見事に實現したと云つていゝ好成績を收さめたのである。

○…重役諸氏

由是觀之、同社の營業方針が如何に堅實であるかを窺知出來るが文化的施設も

また一方 に忽諸に附せず、吉庄グラウンド外二ケ所の遊園地設備費として、五千五百五十

中に新井白石の長文の自書簡もあり、偽物もあるが真蹟である。各通に長方角の法隆寺の小さな印が捺してある。各通の一端に穴が二ツ、穿つてあるのは何故ぞと聞えてみると、法隆寺では保存を要する書類の虫蝕を防ぐ為め、皆な此通り穴を明けて紐縄をとほし、之れを天井に吊るし置くことにするのであると云ふ。斯うすれば虫蝕を防ぐの一法であるが、拾遺あるのは代り盗難にかゝる憂がある。此の数通の書簡なども或る盗変出したものかと思はれぬと一笑した

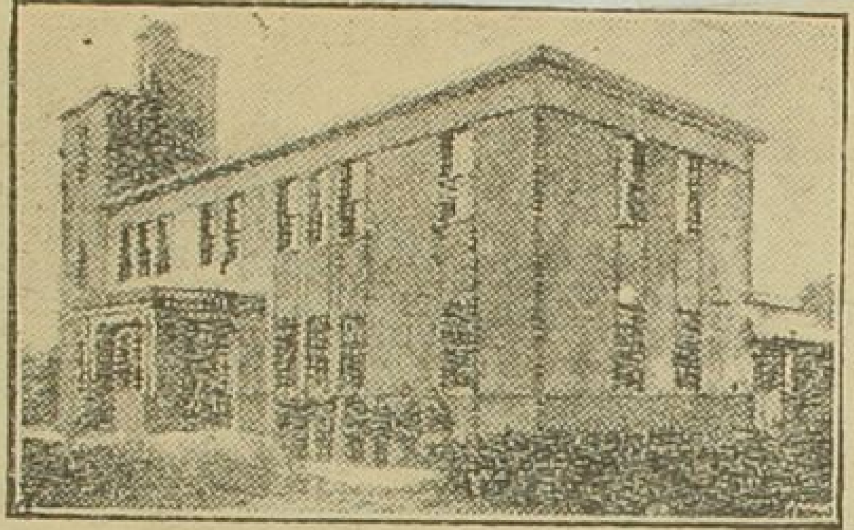
（七月三十一日）

○徳川五代将軍綱吉の権臣柳沢吉保の人格に就て近年研究者が追々出て来て従前云ひ来たつた悪

…謂つて差支へない。

擴張せる羽翼

如上の理由によつて、同社は本縣工業界に寄與するところ決して尠少ではないが、更に、同社近年の發展ぶりを見ると一驚を喫せざるを得ないのである。即ち、



札幌測候所

遠く北海道にその羽翼をひろげ、近くは横須賀方面に牢固たる地盤を築いてゐることである。同社の北海道における活動を見るに、函館及び札幌市北三條に出張所を置き、施工の堅實と迅速とを以て一般の信用を招來し、常に工事の指名請負を特命され、完成引渡しを了したる遞信省堀…工

交通輸送の機能

靜岡電氣鐵道株式會社の業績は逐年好勢

靜岡縣下の物資の豐富なることは、縣勢の一班にも概述したところであるが、これを適宜、相場の變動に應じ、需給の如何に留意して配給輸送の任にあたるには、是非共、運輸事業の發達に俟たざるを得ないのである。更に旅客の輸送も、土地柄だけに一年を通じて年々増加する傾向があつて交通機關の達成には何人もその希望を繋がざるを得ないであらう。從つて縣下奧地方面に貫通する鐵道省東海道線は、沿道交通輸送には、どうしても公共的性質を帶びて奉仕的の交通事業會社の存在を必要とするのである。この點で、靜岡電氣鐵道株式會社の如きはよくその機能を發揮しつゝあるものといつてよからうと思ふ。

○…業績概觀

同社は本社を靜岡市鷹匠町一丁目七番地に設置する資本金三百八十萬圓内拂込金百五十二萬圓の會社であつて、いま試みに大正十二年十二月一日乃至翌年五月三十一日の第十回營業期間内における營業の大要を見るならば、概ね次の如きものがある。即ち、當期間の營業成績は、概して順調であつて、旅客貨物の輸送は、例年上半期の營業狀態に比し極はめて良好である、昨年下半期は震災地方、復興材料輸…

…に十一割二分といふ大增加を見せたのであつて、當業者の期待は見事に實現したと云つてい、好成績を收めたのである。

○…重役諸氏

これによつて之を觀れば、同社の營業方針が如何に堅實であるかを窺知出來るが文化的施設もまた一方に忽諸に附せず、古庄グラウンド外二ケ所の遊園地設備費として、五千五百五十…

本邦製帽界の誇

世界的權威を有する
帝國製帽株式會社

國産獎勵の聲は近時漸く上下にも各方面に唱導せられつゝあるが、輓近、漸々進歩發達の跡を示すわが國各種工業の力を以てするならば、自給自足の必らずしも不可能でないことを看取し得る、蓋し、國産獎勵の提唱が空論として一概に排除し得ざる所以もまたそこに有するものである。この點から、從來いはゆる舶來品を以て至上の重寶視してゐたわが國民の夢は醒まされ既にその證左を製帽界に發見したのは、吾人の歡びとするところでその例として帝國製帽株式會社が斯界に率先してその實をあげつゝあることを擧げなくしてはならない、然も自給自足觀念を有するのみならず進んで海外市場に向つてその販路を擴張維持更に進展の機運を多益に抱藏しつゝあることを考へる時は、同社の貢獻はまた偉とするに足りるのである。帝國製帽のブランドは前掲の如きホークワンであつて試みに同社の誇りとするところを窺かふに、邦製諸帽中では無競爭の優越を占め海外市場にまでその聲價を高めつゝあるは既に周知の事實であるがこれに滿足せず愈々益々優良品の製出に努力し今回自ら曾て製帽工場の經營にまた獨墺伊等の著名なる製帽會社の顧問として令名ありしドイツ製帽界の巨人カール、マイザー氏を招聘し、親しく同社濱松工場の監督にあたらしめつゝある如きは實に同社の獨特の境地であつた今春以後のホークワン、ブランド…

大豆、麩、朝鮮米
貿易商
井出一郎商店
靜岡縣清水港
電話長十五番 私書函十三番
電略(ヰ)受電略號(シミズヰデ)
日本セメント株式會社代理店
◎總て御取引は御互に誠心誠意を旨といたしませう

米の出る三平野を貫いて……

羽越線けふから全通

沿道は風光絕佳な裏日本海岸

起工以來八ケ年

秋田村上間百三十三マイル羽越線は今回の村上鼠ヶ關間二十五マイル九分の開通によつていよいよ全通し今三十一日から青森神戸間に直通列車を運轉することゝなり明一日は秋田市で鐵道側主催の開通式及び祝賀會が擧行され秋田、酒田、鶴岡、村上等の沿道各地でも祝賀の催しがある筈である右について八田鐵道省建設局長は語る

羽越線秋田村上間百三十三マイルは今回の鼠ヶ關村上間廿五マイルの開通によつていよいよ全通することゝなつた大正五年工事に着手してから丁度八ヶ年をけみした譯である最初全線を三分して

秋田 象潟間四十五マイルを北線、象潟から酒田鶴岡を經て鼠ヶ關に至る五十六マイルを中線、鼠ヶ關村上間を南線とし、北線は秋田、中線は新庄、南線は長岡の各建設事務所で分擔することになつて、私も秋田建設事務所長として最初の工事にたづさはつた次第である、起工以來の

經費 は三千三百五十七萬圓を要したので一マイル當り廿七萬五千圓で思つたよりは安くあがつた難工事のおもなる所は今度開通した村上鼠ヶ關間でこの間はすべて日本海岸に沿ひトンネルが三十六もあり山くづれの防護工事などもあつたので一マイル平均四十萬圓を要したまた吹浦象潟間は

鳥海 山の麓であるからこれも困難であつたが岩谷と羽後龜田の間にある折渡のトンネルは特に難工事であつたこのトンネルは石油層の頁岩で掘鑿に從つて膨脹するので非常になやまされたあげ句西洋で海底トンネルなどに使用するシールドを使つて工事を進め今年の春漸く開通するに至つたのである

線路 は折渡トンネルの六十分の一を除く外は全部百分の一でトンネルはいづれも大體であるから將來如何なる優等列車を運轉しても差し支へない經濟上で最も興味あることは本線が物資豐富で特に米の産地である新潟、庄內、秋田の三平野を連絡したことでまた沿道日本海岸の風景が非常によいのもその特色であらう。本線の開通によつて青森大阪間の

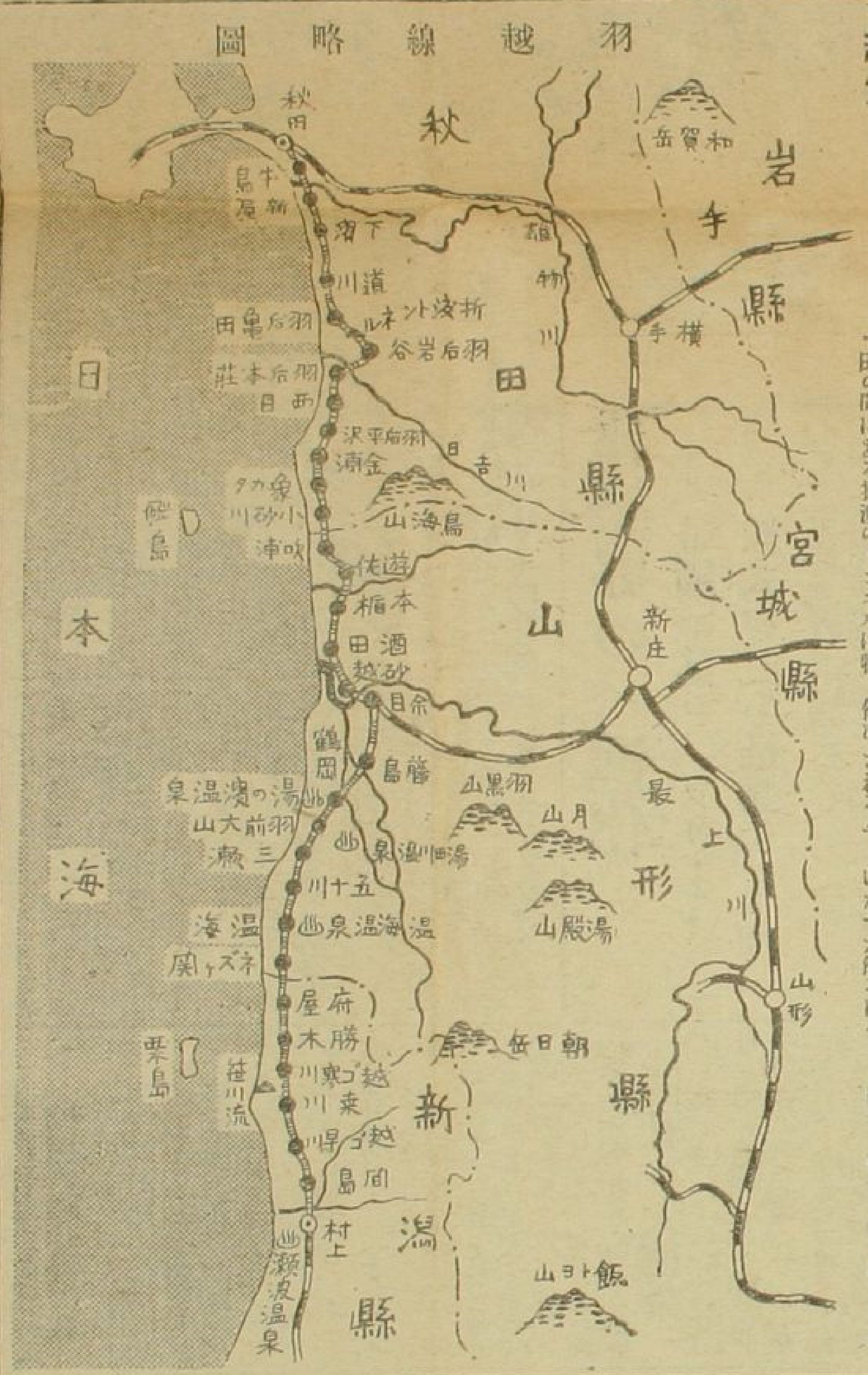
距離 は東北本線及び東海道線迄りに比し百五十六マイル即ち四分の一の短縮を見たから東北本線及び奧羽線の荷物はこれによつて著るしく緩和され從つて東京付近の貨車の混雜も少くなることであらう數年後清水トンネルが貫通して上越線が出來上がれば三平野の物資——木材、石油、米など——は完全に本線によつて

關東 關西にはこばれることになる元來裏日本一帶はその昔海上の交通運輸によつて關西方面と密接な關係をもつてをつたのだが鐵道が出來てからは關東の勢力に侵蝕されるやうになつた然るに今度羽越線の開通によつて關西と羽越の聯絡が密に從したから結局交通運輸も經濟關係も昔にかへつた次第である云々

粟生島の女

女同士の添寢

羽越線村上町から十九マイルの沖に夢の如く浮いて見えるのが粟生島だ、この島の島民には『おこもり』といふ慣習がある、漁夫達が漁に出たといつては、或ひは海が荒れたといつては、娘達や女房達が島の鎮守の堂に集まつて酒を酌みかはし一夜をその堂に女同士の添寢をする、警察や郡當局等がこの『おこもり』をどうかしてよさせようと風俗取締の上から島民達にいろ〳〵勸めたことがあるさうだが、島民達にとつてたつた一つの『歡樂の殿堂』を取り去る事は出來なかつたさうだ



名勝舊跡

谷口 梨花

私は羽越線の名勝に就てその概略をお話しする。

この線は石油の縣の新津から起こり、新發田、村上、鶴岡、酒田、本莊を經て秋田に至る裏日本北部の海岸線で延長百六十八マイル九分、新津から右に飯豐山の秀容を仰ぎつゝ青田續く蒲原平野を走りて村上に至る間と、三瀬から庄內平野へ折れて月山の秀姿と鳥海山の偉容とが車窓に迫る所を走りて吹浦に至る間と、本莊から山に入りて難工事として知られた折渡トンネルを縫ふ間を除いては、汽車は殆ど日本海の蒼波に沿うて走るので、汀線の出入するところ斷崖峙ち奇巖波に立ち、沙丘は沙丘につらなり松林は松林につゞいて幾多の風景美を生み、この線旅行者をして車窓倦くことを知らしめないのである。

海岸の風景美

今回新たに開通して羽越線の全通をなした村上鼠ヶ關間二十五マイル餘は越後山脈の海に落つる所で、鼠取、能化、盧谷、三面、綴合、新代、高谷、鶴宿の沿岸の名勝、怒濤打ち寄する日本海岸に峙ち、汽車はその斷崖を縫うて時々波上を走ることあり、羽越線第一の勝概ともいふべき海府浦、笹川流れの景勝もその間にふくまれてゐるのである。

この沿岸はいはゆる北越の親不知子不知の險難所で、昔、義經主從もこの難所を忍び〳〵に傳うて鼠ヶ關には入つた。勝木から寢屋峠を迂回して村上への道路が出來てからは、この海岸路は殆ど捨てられてゐたが、今は文化の響きをつたふる汽車の窓を見るに至つた。

笹川流れの風光はいはば男性的で、その景色は松島を小さくしたもので、その奇觀は松島に比ぶべくもないが、これには彼れにない風趣がある、俗に三樹が松島の美と男鹿の奇とを兼ねそなへたと稱へたのはその要を得てゐる。その景勝は桑川から脇川に至る汽車內からも大方は見らるゝが、おなじくは桑川に下車して遊覽船によつて觀賞するがいゝ。私は曾てその桑川から船で脇川を經て鼠ヶ關まで行つたが、脇川の渡邊氏の磐上堂から蒸薬岩を見た景色を「わすれられぬ旅の印象」の一にかぞへてゐる。

海岸の風景美は笹川流れの外に勝木の鮮立岩、鼠ヶ關の弁天島、溫海岩坪の立て岩、三瀬の入乙女の勝から由良の白山島、その白山島を見越して鳥海山を仰ぐ眺望がいゝ。北の方では吹浦の十六羅漢岩、小砂川の大師崎、象潟、金浦、平澤の海岸、道川、下濱の海岸も風景美があり、しかもそれらは皆多少の遠淺を有して海水浴にも適し、松林の綠濃き線を彩り、寄せてはかへす小波のほとり、旅行の一夜を過ごすに足る旅館も備はつてゐる。

到る處溫泉地

海水浴場よりもこの線のほこりとするは矢張り溫泉でなければならぬ、湯田川、湯野濱、溫海——いはゆる庄內の三溫泉を始めとし、鶴岡の松山溫泉、坂町から行く荒川上流の高瀬、湯の澤、關溫泉、水原から行く村杉、今板、出湯の三溫泉、秋田寄りには溫泉はないが龜田から行く白狐鑛泉、吹浦の田蟹鑛泉などがある。

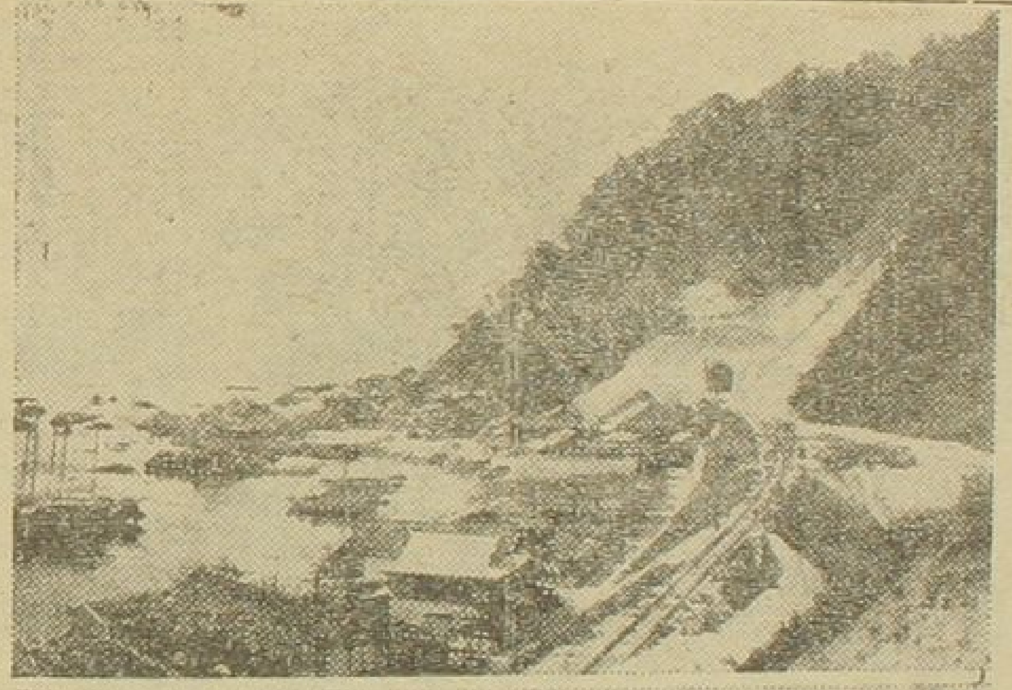
私はこの中で湯溫海がすきである、三面を翠巒にかこまれた溫海川畔の幽邃境、三層樓の湯宿が廿四軒も軒をつらねた湯の町、旅行者の心を落ちつかせるその家族的の待遇、それに他所に見られぬ溫海名物の朝市、絣姿に赤い帽子をかぶつた女たちが魚や野菜を並べて客を呼ぶ有樣は、「旅のうれしさ」を與へずに置かぬのである。

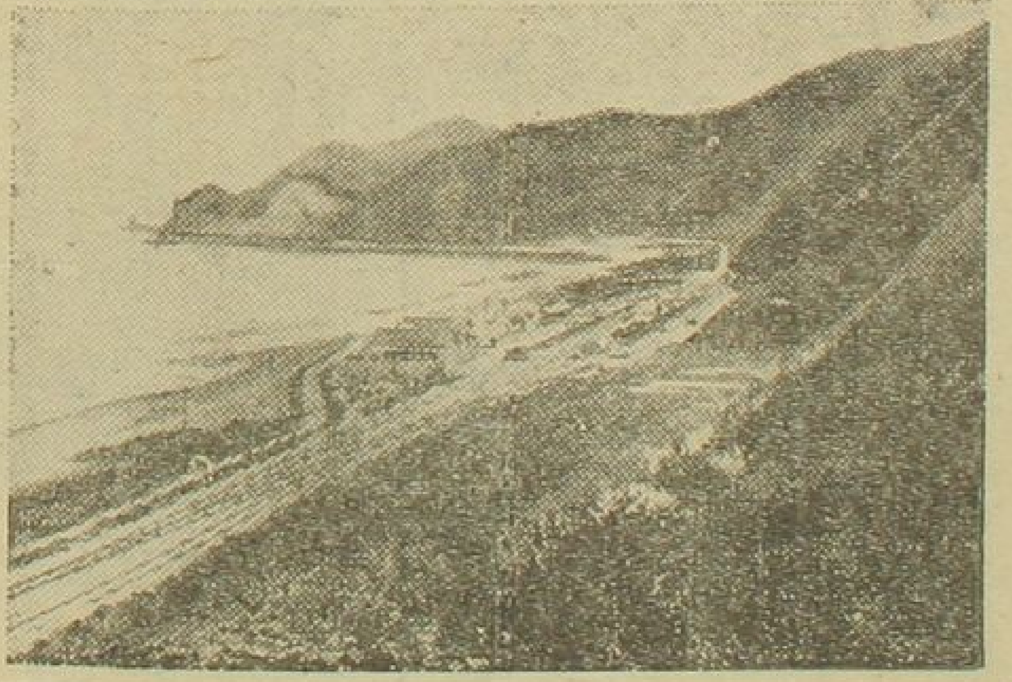
湯野濱は東山と上の山と並稱せらるゝ奧羽三樂鄕の一、遊樂的の氣分が漲つてゐるが海岸溫泉で海水浴をかねらるゝを特色とする。湯田川は山の溫泉で落ちついた所だが、近來溫海に壓倒れた姿である。

瀬波は海岸溫泉でしかも明治三十六年石油の代りに湯が噴き出した成金溫泉、旅館も好いのがあるが、脂粉の香の濃い所である。羽越線全通後はこの瀬波と湯溫海とが覇をあらそふことゝ思ふが、軍配は果してどつちに上がるだらう。

三山と鳥海山

羽黑山、月山、湯殿山、この三山の岸容を仰ぐとは、この線旅行者の樂みであるが、特に酒田以北本莊に至る間は西奧州に君臨せる鳥海富士の裾野を日本海に曳く鳥海山に沿ひ、車窓おのづから襟を開いて向かはせる。その山勢は象潟付近で西施が「松島は笑ふが如く、象潟は怨むが如し」と稱へた景勝地をなしてゐたが、文化の大震によつて海底の隆起を見「南に鳥海天をさゝへ」のながめはあれど、「その影映りて江に化り」の景色は昔の夢となつた。がいはゆる九十九島の內なほ三四十の島は殘されて桑松を戴いて點在し、蚶滿寺內西行歌櫻、親鸞上人腰掛石、猿丸太夫姿見井、時頼手植躑躅など、古のおもかげを偲ぶものがあり旅情をそゝる。「象潟の雨や西施がねぶの花」夏のころはこの邊り芭蕉の吟味に入つたその合歡の花が盛んに咲いてゐる。





開通した羽越南線（村上鼠ヶ關間）——（上）難工事の脇川隧道（下）桑川停車場から海岸の名勝『笹川流れ』を望む

難工事の南線

二町半の隧道が二年四ケ月

越後女の大手柄

今度開通した村上鼠ヶ關間二十五マイル五十八チェーンは殆ど全部が新潟建設事務所の所管に屬し大正八年七月の起工であるが海岸の斷崖絕壁の間を通るので地質が惡く非常な難工事であつたトンネルが三十六もあり加ふるに樋本新潟建設事務所長は『地質の惡いことゝ材料運搬と人夫募集の困難なとのために非常な苦心をしました』と語つた、地質の惡いとは甚だしいもので脇川トンネルの如きは延長僅に八百四十四フイートを二ヶ年四ケ月もかゝつた位である、また人夫募集の困難なため一時監獄囚などの使役も考へられたが勝木驛付近の女達が土地の親分にひきゐられて土工のむれに加はり線路敷設工事に好成績を擧げたことは本紙に特記した通りで勝木出張所の坪井技手の談によるとそこでは男より女の方がおほく働いた、セメントかつぎなどは女にかぎるといふことであつた、鐵道工事に斯くまで女が與かつて力があつたとは殆ど前例のない事だと鐵道當局者も越後女の活動振りに舌を捲いたさうである

説を排除するにつとめてゐることもある、吉保などもあし
さまに云はれてゐる人ハ多くあるまい、俗間に伝はるところ
でも、識者の間に伝はつてゐる説でも、吉保をあしさま
に云ふのが殆ど通例とされてゐる、吉保
の妾のおさめの方ハ綱吉の手のかゝつた女で、其が孕
んだので、吉保に預けたと云ひ、其の子の吉里ハ綱吉
の子で吉保の子でないと云ひ、終に百万石のお墨
附を内證に貰つたなどの説をうみ、更らに綱吉の
夫人が天下の大乱の基だと憂ひて、綱吉を弑して
夫人も自害したと云ふ説さへ伝はつてゐる、斯る
言ひふらしを受けてゐる位であるから、吉保が非常
な豪奢を極めたこと、諸大名から賄賂を納

めたなど云ふことハ勿論何人も疑はぬ、その他種々流伝
し柳沢と云へバ乱臣の標本であるかの如くなつ
てゐるが、追々調べて見ると、信じ兼ねることが多い
である、綱吉が孕み女を柳沢に託したといふことも信
ぜられない、おさめの方ハ吉里を産む前に既に
一子を産んでゐる、綱吉ハ十八年間に五十余度
と柳沢邸に親臨してゐる、それをバ一ヶ年三十
回と親臨してゐると曲筆し、おさめの妻だが
子を見る皆早つおさまるを見為ふなんとあるが、
其実ハ吉里が生れても五歳の時始めて謁見してゐる、
若しおさめを預けたとするならバ五年の間訪ハ
ずにゐる訳もあるまい、綱吉の死も夫人の死も常

猖獗に流行した疱瘡の所為であることは事実であ
る、吉保のことも時めく権臣に賄賂を贈ることも絶無
ではあるまいが、吉保は割合に富んでゐなかつた証拠
として寺を修めるに大切な家財の黄印をも散て
した、そのことが文書に残つてゐるのを見ると、金銭
には恬淡だつたらしくも思はれる、研究家がこれ
まで論證を遂げた結果に據ると、不思議にも柳
営の為したことゝなつてゐることが多く牧野成貞に
依つて為されてゐる、成貞の妻への綱吉の目に止まれん
献上のこともあるまでのつれ、其綱吉ハ今四谷の杉大門全勝
寺にある碑にあり〳〵と書かれてゐる、牧野ハ他に綱吉
の寵をまとめてもゐる、これが又柳澤のことゝなつてゐ

る、おさめなが登城したのの如くに云はれてゐるが、それ
は事実ハなくして吉保の西室が一回登城したこと
ハ確かであるが、これとて表向きのことで別に綱吉
ハなく、牧野の側にゐると綱吉が月に数十回も
親臨して綱吉みづから養女の世話まで焼いてゐる
それハ成貞の室を奪つた縁因からであるが、すべて
成貞と将軍との綱吉の関係が餘り世にあらはれず
何も彼もすることハ皆柳澤のすることゝなつてゐる
のも何故であるか、太宰春臺の書いた三王外記や
白石の書いた折り焚く柴の記などに先づ柳澤の
ことがあしざまに書かれてゐるのが一概に其れ等
を信じてます〳〵柳澤ハ不評判となつてゐる據

であるが、三王外記も或は春台に托して何人かが作つたものであるかも知れぬ、白石も己が仕へた将軍を揚げる為めに前将軍や其執政をあしざまに言つたと云ふ説も無いでもない、牧野が微賤から起つて志きりの累進したのは、然し綱吉の閨閥問題から深く酷んでゐる人が然かいふ事実があるのは甚だ嫌な柳沢のことも輪縁されてゐる疑のあるのと一奇と謂ふべきである

要之此等は史料を徴して仮説を多く掲げて在るが是れは妾を嫉むて受けた者と云ふ風評を打消さうとする為で、楽只堂日記は矢張自筆の日誌である、是れを読めば謹ます者ハ何かと思ふ…

の中におさめ、子があつたが、是れは一歳にも経ず夭したとあつて、其後にも乗せて無い、この子も男であつたが、是れから十年を経て吉里が生れたのである、若し第一子が生存でもしてゐたならば御落胤説などは起り得ないのである、

綱吉が男色を好んだと云ふ説もある、柳沢が之れに迎合せんとして多くの少年の子弟を家に預かつたのだと云ふのもある、柳沢が多くの男子弟を預かつて教育したのは事実であるが、これも人材を国用に供せんとしたのであつたと見ることも出来よう

将軍が臣下の家に親臨することもあつたが、是れの

為め新殿を心つよく修繕をしておい入り
であることが日勿論で吉保は此為めに費用
の金を公儀より拝借し、蕪し柳澤家では
つれとすれば公儀より拝借をするも[illegible]
かのたびあらう

吉保時代の勘定奉行に荻原近江守と云ふがあて
悪貨を鋳造して白石の時に弾劾してヤツ
ト黜けれたが、此の荻原の責任を吉保も分擔
せねばならないが、併し荻原が紳商と結託し
て金儲をしたことまでが皆な柳澤の罪に
嫁されてあるのは冤罪である
吉保が決して奸臣では無かつたことは松崎の随筆

甲子夜話にある通りで、恐らく正しい観察
であらう

柳澤が家を頼んで隣家の伊東修理亮の屋敷
を所望が許可、幕命で譲り受けて新屋を
建てたと云ふ説がある、伊東家に[illegible]安井
息軒が此事を谷干城に語つて憤慨し
たと傳へられてゐる、去乍し研究家の云ふ所
に據れば、新屋敷築後廿五年の後、正徳五
年吉里の代に始めて伊東修理亮祐永の邸
と隣つたので、新屋建築の為めに隣地を貰ひ
受けたことは無い、安井も何か思ひ違ひをしてゐた
のかも見受けらる

護国女太平記といふ作者に見ます柳沢はサンく
にきめつけてゐるが、お伝の方と云ふ妾を将軍に薦
めたのも自分の妻アグリを将軍に献じたのも、自
分の二女安子が将軍の近侍に出たのも皆吉保
野心からである、其貞の妻アグリと綱吉の母桂
昌院こを作したらひ其貞と嫁したのも桂昌院
の指図である、月に黒田と云ふ将軍を生母が交
に其貞の家に行き、安子張しく後に使
者を差出したら、其子である其貞に養子
の世話を将軍から頼まれし吉里といふ物語めて
異数のことである、護国太平記の材料へ
物望を柳沢にかへて以上のうち実を附会する

れたのである、柳沢の方ではあまりにも露骨
の秘事は意を見ぬやうにして、もし将軍の心をつ
れたことが皆この柳沢の所為と附会されたと
すれば柳沢はトンダ冤罪を受けたものと
謂へるのである。
徳川時代将軍家の大奥に行はれた秘事は誰れ
も彼れも耳を傾けたがることを静かに、別して
婦人に関するローマンスは格別として喧伝し
たのは相違ない、甚しく附会もして尾に尾をかさね
百萬石のお墨付と等しく将軍様の風説ま
でたらめのもの、前古人を例のない思ひ切つた
大小説が、甚しく後の長い間深く人の頭

觀音像（六朝の肉筆書）

腦に滲潤したのも、脚色の妙とその鋭さと云ふ技
なるとれ困るのであるが、関係の関係から顕著
の地位に任上つた牧野に於り嫉妬がそこ
其の後進である柳澤が同じ立身の為め嫉妬
を受けた先任の関係関係すなわち十スリつけ
られたのも柳澤に取りては迷惑と云ふ称べきな
らぬ、いつの世にも新らしいことを好む人の癖
があるのである牧野時代のことを柳澤の
ことにきつけて新らしい味を帯ハせた風
説子こそ羅作りなれ
（七月十五日記）

脳に染潤したのだ、脚気の如きもの飽きる三の校

観音像（六朝の肉筆畫）

裏面に彫刻にて脇士二尊を彫りあり。此観音像は着色にして、臺座に河清四年と記しあり。一千三百年前の肉筆の畫像也。法隆寺の佛像より約百六七十年古し。惜哉僅に一尺二寸許の小像なり。併し年號の入れる六朝の畫としては天下唯一のもの、とすべし。

中村不折記

○八月一日 帰りて下る途中大隈侯を軽井沢の別荘
に訪ふて一泊し翌日彦根と同伴した、軽井沢は流石
に清涼の氣が漲て麻の衣裳を着て居ては寒く感ず
る位であつた、此地に目下親戚の矢吹男の家族が避暑
中であるから是れをも訪問したのでした、近ごろ開かれた
此の高原地の大勝を今得し得た、如何なる大観模の
地域で四通八達の大道路が開かれて居るのは嬉しい、
目下別荘其他の人家は今僅かに千二百軒位なるが、遠
しからずまへからく、廣ろい高原と化して寥々たるもので
ある、植付けた針葉樹もまだ小さく今大きくなるべく
から漠々たる原野を望む感があるが、こんなが十年
も経て生木しなくば大森林の觀を為すにあらう

既に
或る二三の別荘等は落葉松の山林を風致としてゐれば
がナカ〳〵趣がある、日本風の小細工目深山の作庭に比
すれば、却つて高雅の風趣がある様に覚へれ、私は信
り潤澤とも云はれるが、小河が潺湲の聲をなして
流れてゐる、私は深地を訪ねて見ると、叢竹の下に
清洌の水が湛へてあつて、處々の地頃には特に峡域を異ま
[illegible]覚大水、野澤但は此地の地區を公園に充て岩
干の設備をなし、隣地にはゴルフの競技場
施設も出来たが、規模の小さな[illegible]北方原の他
日は恐らく大公園の観をなすだらう、今の所では
人家が稀薄で、[illegible]庵中[illegible]の往来は私設[illegible]
識もあり、日用品を弁ずるにも不便もある、[illegible]

どうしても今後大発展を要する、併しいくら発展して
気候の関係上冬期は別荘を閉鎖して寄りつき得
ない、これが此地の缺點で、相当の努力あることあひなければ
が住宅住区が出来ない、其の結果贅沢階級の
者有に帰するの傾きがあるのは已むを得ない。因に
一言を探す、大隈侯別荘の背後に主として聳する
一峯が、こんな[illegible]侯の別荘に[illegible]の[illegible]を深める[illegible]
[illegible]山は離山[illegible]徳川時代皇女降
嫁の時東海道が物騒だと云ふので避けて中山道を
通つたさうな、此山林を通られたが、離れの二字が
不吉[illegible]とあつて[illegible]名を改めたと云ふてゐるが、其
の名は未だ知られない[illegible]が出来ぬ、[illegible]漏らした、

大隈侯の別業を詠ふのをこんで三ヶ月であるが、
日本式の坐敷の出来たのを見るハ今度が始めて
ある。老侯夫婦の在世中ニ新築が出来たのであ
るけれとも、終こ之れを見ずして大正に他界せ
られた。此の坐敷ハ二タ間つゝきで、地形よろしく
見晴しもよい。洗面所や便所も附属して流れ
こ下窓ニ出来て居る。老侯が見らるゝ及ハず堯
きれたのハ遺憾であるが、此坐敷の出来たる為
めに此年摂政宮殿下の御避暑台臨を辱
ふし、老侯ホ遺憾なしと云ふべきであら
う
殿下台臨の際のことを承るに供奉員総数百名余

此上り、乞れを済せしあるゝハ候の別荘ニ手狭ニ付
御寝こて遥りて居食を皆外御乗馬十
頭を収容するために廐を作る旨御聴方
面の往々より来りしも容易のことではなかった。
大隈様の創意ある善通の立花を用ひ
なかの例であるや、其ホを後設しなかった。且
居などこれ七様の世帯ささ、かの例ってこれを新
設せるに附属せる便所を仕切り之れと共に並
しなどと云ふ二間の日本坐敷の奥なる方に
寝室を置き廣々き方を議の間に充て
たとか、前年故方公の御側の別荘に台臨の
時ハ群や館坐敷に入りて困らせられたと云

山を始めとし大隈家にてハ特に銅緑を張りたる
床を設けなを素い絵くりを清する、御出臨用
の諸道具ハ殊しき目量にて見えを納め
たる棚の数ハ家る物の多きことのあらけるが侯の
別荘と附属するものまたとこく大きなるの
みと、見をことごとく見入れ得たりといふ、只屋
のことき所と御宿泊のをかとて警護に容
易のなりにあらず今今に別荘附近に無数
のアークライトを點し不夜城を現出したり
とか、伊出路中大隈侯ハ附近の別荘を借
り受け日に清栽媚例を為すを例として、宮
内官の悪習として日に相当の馳走に飲

からさんハ不平なり、これに關しては一方ならず
面倒を見たりと大隈侯謂ふ、勿り高貴
の人を宿すの容易ならざるハ真に想像のほか
にあり、十日間御宿泊御務室の家加
藤首相死去の後七日間にて東京へ奔走
醍あつたりとぞ。

○西蒲原の酒造家多賀氏ハ白雪の銘ある酒を醸くを
以つて名高し、此頃久須美雪堂にあけば、此家に山陽の
片ヶ瀬の詩幅ありて、片ヶ瀬の帖ハ願の見るべしと
いへり、余知人に折して其の家を訪ふを得んことを依頼す、
新潟に山田穀城に会し時談偶ゝ此ことに及ぶ

教淑女の詩を写しえりありと示すを見れば

東風料峭雨斜斜、泥濘芒鞋一路艱、誰引
老夫来喫苦、直将戦手写梅花

二月念三日観梅于月瀬途上詩

録 山陽外史

此行拉林谷山人、此印其所刻、其杖甘諾

右の如くにて、益城が山陽に従ひて梅渓を訪ふ紀行に林谷甘諾を杖にして山陽の為印を刻することを載す、山陽此詩を其時の作なることを知るべし、但し益城紀行中此詩を収めず、余が山陽遺墨録此詩を収めたる所以ず、林谷の画冊は半紙大の小画十枚許を一帖としたるものといふ、これなる山陽

の題跋ありしと語る、これ月瀬途中作るものとあるべし、其書を得て後の之れを捜さんと欲す、多賀氏は芳延といふ今日物故せり、山陽の詩を見るに梅渓訪ひし時雨に遇ひ路程困りたる様子は八つありの句彼梅花に迄及びおることにも推し得べし、

○今次新潟に滞在中此地の富豪斎藤喜十郎に招かれて西大畑町の別邸に招かる、此家一方行形亭に隣り一方に友政五山峯の宅に隣す、余之を聞きに行くに斎藤の別荘を見るは之れを始めとす、建築作庭流石に美を尽くせり、唯其作庭庭樹石多きに失するの感あり所謂新多流失の

数か銅臭俗臭甚しく（を免かるゝ能はず）、但し坐敷に山陽三四人
物を詠ずる十断句一枚見るべし、床に掲げたる蕓窓
の茶和瀧吉條幅、別室の山岸駒狀和詩の画幅
賞玩の價あり、蕓窓の幅は藤井家の四花亭
幅の下部左端に三井氏圖書記の印を見る、三井家
四花亭の来歴あることを茲に附記しおくことを
を知り得たり、一覧後陳亭にて午餐の饗を受
けたり

○曾遊の地なる会津の柳津に於て總久山を訪ひ
新次郎氏並に弥彦を紹介して總久山の境内先年
と格別異なることなし、唯此境内の背後の丘續に
ニ若干の田ありしが今は池と變し池畔に茶店

を見るのみ、此茶亭の二階座敷は高らく風通しよ
く納涼に可なり、一行爰に憩ひて午餐の饗を受
け席上人の需に應じて悪筆を揮ひぬ、ここに来つ
て想ひ起すは前年徳川積翁と同伴爰に遊びし
際偶ま牧野茂氏に遇ひ、予の案内にて義犬塚
を一覧し其義犬の経歴を聞き犬を愛する
余は大に感ずる所あり、子爵に向て義犬は閣下の先代
の勘當を受けしに拘はらず、ここに殉死したれば
大に賞すべし、自分に免じて勘當を許さ
れよと云ふを子爵は快よく首肯されたるに付
自分は塚に向つて主公より勘當が許りたと告
げたることありし、蓋し此犬は牧野茂氏も江戸生

府の行列に加はらさりしを憾みとし、あとより追ひて
江戸に到りたる者なり、江戸に在るの日隣家の大名の
犬と闘ひて之れを害したるを戻聞て叱責されたるを
犬は深く悔ひたるもの如く情義去つて長局と帰りたる
も城門に入ることを許されさりしかは、此の熊久山辺にて
なり其時疲労の極に力尽きて斃れたり、塚の在る
は所謂其の死せる処とて、此犬もと熊久山附近
の農家に生れたるものといふ、或は其生家に到らんとして
途中斃れたるにやあらさるか、予曽て此事を記し
たる随筆「あり古志の風車」と題して標題したるを
また嘗つて予の為めに示されたることあり、北条氏の午
後余は此等の事を余に語り出されたが、勘当

を許されたる一事は実に初耳なれは頗る興味を覚えたり、大宮
への帰路は此の犬塚の傍らを通りき。大隈侯も特に一読
されたり

孫彦は余も珍らしからされとて鉄道線路の辺に係る
公園は今次初めて見る所なり、経営者久保田東馬氏
特に東道説明もありたるに対し大いに面目を得たり
大体公園は六萬坪にも餘る大規模のものにて、園内
は全く開放されて吾等も自動車にて周遊したり、樹
石の類もあるにはあれど皆な遠くより運ひ
来りたるものといふ、広き区域に相当の風致を備
はり他の樹木あるなしは一見のみにてはあらん、此地
に之れを見出すは誰れか経営家は苦心せしなり、但

清興半日

（彌彦陪遊記）

一記者

□「樂燒き會」の雅集に列して、彌彦に參する機會を得たのは、ツイ先月の二十日であつたが、大隈侯爵の一行に陪して、同じ靈境に重ねて塵腸を洗ふことの出來た記者は神寵わが上に厚きを覺えて、出發車上、胸絶えず喜びに躍つた。

□月の四日。わが久須美社長の東道で、侯爵一行に彌彦紹介する計畫が成つた。折納田法師が講演の爲めに北浦方面に赴かれたのは遺憾であつたが、快談縱横の市島春城先生あり。車中の感興は雲の如く湧く。

□此行に加はつた松井代議士と、わが社の姫峰先覺と記者とは、先づ接待委員の格だが、それよりも更に此の遠來の佳賓を慰め得たのは恐らく忽然として現はれ來つた二個の艶容媚態であらう。悉く是れ舟江羅綺叢中の粹。好旅行に好伴侶。嫣笑の花は斯くして益々色を濃くして行くのであつた。

□出發は午前十一時三十分。車中には卓を据ゑて、清涼飲料水の凡てが用意され、客は且つ飲み且つ語つて更に徒然を感じない。送水迎山。何時しか目さす彌彦に下車した一行は直ちに驛前で本社寫眞部のレンズに記念影を殘す。

□先づ以て神社に參拜。彌彦公園に引返して自動車の儘隧道、電馳し、車上にして園の景勝の半ばを眺覽し、半ばは徒歩でわが社の説明に、一行耳を傾けつゝ、規模の大と風致の幽とに讃歎の聲を吝まなかつた。殊に侯夫人は名にのみ聞いて、未だ踏まざりし此境に來り、亡き老侯曾遊の昔を回顧し多少の感慨をさへ催されたらしく見受けた。

□公園一巡後、イタリヤ軒支店の樓上に午餐を攝る。酒を侑むるもの新潟より拉し來つた名花三枝のみではない。別に三條の大妓小妓子が亦坐に姿を見せたので、興未は何時盡きるとも覺えぬ。況や微醺の面上に、欄前より、嶺角より、溽た樹蔭より水涓より、頻りに爽涼の風を送り來つて、炎熱の氣を一掃するをや。「此儘こゝ泊りたい」など、興到るが儘の語中にすら、どうやら自然の響きを聞くのもまつたく此場合無理はない。

□座中の即興に樂燒を試みる。紅寶堂主人の乞ふが儘に、侯爵筆を下して「自彊不息」と自ら隷書で弘堂と署名して與へる更に阿嬌に迫られて、或は「壽」、或は「麗」、又或は「紅情綠意」と何れも鮮かな墨蹟を殘される。春城先生も松井代議士の爲めに「痛飲眞吾師」と書し、三條の佳人には「松梅業條」と碎けてシヤレるかと思へば「紅瘦綠肥」と堅く出たりして種々變化の奇を示す。「嬋娟」、「艷姿」、これらは風貌趣態に應じて、皆それぞれに先生、文字に托した月旦と見た。わが暘谷社は描いた四君子が、意外の隱し藝として、一座の注視を惹いたことも、逸す可からざる清興の一つであらう。

□樂燒が終ると今度は書畫帖の注文が出る。侯爵は迷惑の色も見せず「靜家」、「帶雨」、「暢神」などゝ得意の隷書鮮かに一つ一つに書いて行く。春城先生に至つては「これでは全體遊びに來たのか勞働に來たのか分らぬ」と例に依つて大いに興じた、其鑑賞は好きな道。結局「詩情茶味」、「筆底雲煙」、「磊々落々」と淋漓たる墨痕で需めに應じた。記者は唯だ樂燒の湯呑と菓子器に

いや彦の山のみどりもそよ風に
交りて吹くや涼しわが袖

の惡作を塗抹したに過ぎなかつた。

□此の歡談の客を載せた歸途の列車が新潟に着いたのは晡に近い頃であつた。夜に入つて鍋茶屋に侯爵及び春城先生歡迎の宴あり、われら一行、再び其席に相伴して金釵紅袖の間にも尚神さびた靈境に涼風を趁ふた半日の詩興を想ひ起すのであつた。

し公現に若干の私あり、或は湯を召し或は藥をのむもし
公に出る規模の割合よき發揮の觀あり、陛下に愛を
全骨狀に埋めて日本廣汎区域の私を一所に集中
し、之れを私源とするが日本私を得る一方にあらんも、他人所
有の地下にまで愛を通ずるには種々の故障あるべし
久須美氏語る、當日新潟より名妓を伴ひて神社參
拜の後伊太利軒支店に宴を張る其際の記念すべき
同行山田毅一の記事を新聞に掲載しあり、即ち是
を左に納めおく

○新潟滞在中郷人町田某より三冊の書を贈り来る
蓋し余が同些に趣味を有するを知れるに因る、其書越
海漁蓬」と云ひ、上毛吉田梅翁鐵叢を撰みて越
後に寓り淹留八年し、交はる所のこと翰墨界
にありしとき其、此書ハ其の交游の人の詩書、俳
歌等を摹刻したるもの、各紙欄外に筆者
の小傳を録す、亦一時我越翰墨界の一端を見るべし
梅翁別に越後人物志の著あり併せ觀るを便と
す、宏一夕暑熱に依りて困頓睡眠を得ず、
試みに之れを採って觀る、我耳に熟するの筆者十数
あるのみ、而して他ハ知らざるも其の附傳を
見れバ皆素封の家よりの其業を績

甚だ忘れ難きものあり、現在其家の子孫の疏くれ
るも相距る遠きものあり、依って此書の刊年を閲
するに嘉永五年とあり、當時我紙面の
文化への最盛期隆盛ハ期ることを、嘗て云友世峯北派詩
話を著すに、此書を参照の材料とし以る八墨て謂ハ
丸るきるあるを知る、余が架中此書を闕くを以って喜
こあて贈を受く
甲子八月七日新潟旅館に於
て志るす

○新潟の暑熱ハ頗る猛烈ひある昨日ハ尤も甚しく風なし夜十時
寝に就ても殆んど睡眠されず、尤も起きて雨戸を開
け放し、氷を和しにビールを飲し、一ん二ールのお藤
でやりに眠ることが出来たれど終の新聞に捨纖するる

氷よりつめたい

水になった空氣

理學士遠山霽

世界中でいちばん冷たいものといへば、たれでもすぐ氷だといふでせう、けれど實際はもっともっとつめたい、氷位の温度があればぐらぐらと煮えくりかへるほどのつめたいものがあるのです、何でせう？それは空氣を水にしたものです。

空氣を水に？おかしいですね？その話を今日は致しませう。みなさんや私たちが、ねても覺めてもたえずすうてゐるこの空氣は、液体にすることが出來ます、そして

それをいろいろの有益なことにつかふことが出來ます。

みなさんは、氷が水になるには寒暖計の零度以上三十二度であることを知ってゐるでせう、ところが、この空氣を水にするには實に零度以下三百度といふてひどい寒さにせねばならないですから水を氷にするよりは比べものにならぬ程の寒さでなければならないのです。しかしこのやうな寒さは一年中にありません。また世界中をさがしたってありません。あの年が年中

氷と雪との北極

でも一番寒いのが零度以下八十度です。そこで自然これは學問の力を利用して人工でやることになります。先づ非常に丈夫な金屬製の器に空氣を入れて、その上に二百氣壓の重量をかけます。たとへてこれをわかりやすくいへば、その空氣の入れてある器物の面積が十尺四方あれば、その上に四十九萬貫匁といふ、恐ろしいほどの重しをかけるのです。して空氣をしめつけるのです。すると空氣は無理におさへられるのですから

大變な熱を生じ

ますが、しばらくするとその熱がさめる。そのとき急に重しを十分の一にへらすと、おさへられてゐた空氣は急にふくれる。この時に今度は大變な冷氣を生じて、空氣は白っぽい液体になってしまひます。その中には氷もあれば固体炭酸もある。それを濾過紙でこしますと美しい清水のやうになります。これが即ち水になった空氣とでも申すべきものなのですが、そのつめたさといったらおはなしになりません。先づこれを鐵瓶にでも入れて

氷の上にのせると

すぐ、ぐらぐらと煮え立ちます。もしその中にゴム管でも入れたら忽ち棒のやうになってポキンと折れてしまふ。鉛の棒でも入れたらおそろしく固くなって、それを打つと、とてもよい音がします。美しい百合の花でも入れたらそれはまるで焼物のやうになります。もし人間の指でも入れたらそれこそ大變、すぐさま黄色にたゞれてバナナ見たいになってしまふ。

この水は醫學に極めて有益で、傷口を消毒したり、大きな腫物をとったりずゐぶん大切です。工業方面ではいろいろの藥品にしたりことに火藥の製造にはなくてはならぬことになりました學問の力は偉大ではありませんか。」

昨日の最高温度九十四、一を算す、此七日北地同日の温度八十六、二に比すれば實に大なる差である、東京に比すれば三四度は高く、東京の如く夜間の涼味が無いから夏時の歸省は困難なること、今更ながら感じれ、偶ゝ到達の新潟

紙上涼味萬斛の記事あり、東京の編輯者新

尚愛し收めて暑熱を掃はんと擬す

八月七日記

の新潟をさるの前夜八九の友人を錦茶屋に招飲す、此日偶々石塚氏治療を受けつゝありし歯修理終り一義歯裝置す、集始めて氷塊を噛む、余諸友に謂ふて曰く今夕諸君を招くは、歯の復興を祝するためなると、今日以後物を噛むを得ん、坐中の氷塊を噛みて坐客に勧むる、実の旅中人を招くは一快なり、相共に親しむも一快なり、痛飲更の深くなるを知らざるも一快なり、從來歸省毎に新潟の諸友を煩すこと甚し、各種無き能はざるなり、此會を催す所以なり

者ハ、嘗テ十字を掲き必須美東島乗上のものと来り
會せず。尚ほ掲くべくして掲き得ざりしその一字
あり。これを荒川涵二となす。彼れ中店に羅り、一月以
来病蓐と来り、前日其家を訪ひしも面会するを得
ざりし程の重態なり。彼れハ新潟校友中の才物
たり。其父ハ余が新潟学校時代の学友、其祖父も亦題知の人の
題なり。余の先代と荒川氏とハ三代の縁あり也。而して昨夕
坐中に[illegible]を欠きたるハ遺憾限りなし。余の最も遺憾
とせし所也。但し此日山崎会前、荒川氏も書
画帖を持ち来て一帖来り、余に巻首に揮毫
をもとめ、且つ標題を署せんことをもとむ。
余謹して其帖を展観す。在港諸同人の揮

毫を収む。蓋し病気全快の為めに特に作りしもの
といふ。余直ちに筆を取つて「回春」の二字を巻首
に書し、標題に「臥游帖」の書名を作り、帙の
標題には「酒社金蘭簿」と書して録して酬ひた
懐を寄せたり。彼ハ本年四十二歳、春秋尚ほ富めるに不起の
病に罹りたるは憐れむべし。これ切ないものことなり。昨夕来会するハ松井花塚、高橋道庫
男の校友加賀幸三、山田穀城の新潟新聞同人村島
靖雄、山中椎の回生堂同人の七名なり。例のごとく痛
飲十二時に至り漸やく宴を撤す。余帰宿中の一快と
なす。

八月八日記

此夜孫彦と同伴の三妓を招く。皆先帰す。席上
山田穀城を促して進会をいはしむ。これ近頃の[illegible]

さらしが、さらく名人また余に一語を嘆せしむ
松井ハ酔後名人の退合を聴かすへしと自動
車に余を拉し下町の某楼に多くの妓を召す
中に二妓頗る達人あり、酔後猶醒めての音耳に在
り
八日晨、関東の途に就く九ツ朔帰宅すれハ道市
の池水清涼を見しり来り人気を爽ます、紛々
との別天地なり、見る此炎天に帰着せる●一週
を欲す

閲覧室